

# 中子塚境遺跡

1978・2

小布施町教育委員会

# 中子塚境遺跡

長野県上高井郡小布施町中子塚境遺跡発掘調査報告書

1978・2

小布施町教育委員会

## 序

古代遺跡は、地域の歴史を解明する資料として重要ですが、最近、各地において盛に実施されている公共土木事業によって、これらが損壊される恐れがあり、文化財保護の立場から、大きな問題として取あげられるようになってきました。

昭和50年、小布施町におきましても、松村・中条地区の遺跡の一部が広域農道工事の計画に編入され、その保護を如何にするかが問題になりました。幸にも、工事担当の須坂建設事務所・北信土地改良事務所の理解ある配慮と県文化課の御指導によって、緊急発掘調査をして、記録保存することになりました。まず、昭和50年度には、建設事務所担当区の大道上遺跡の発掘をいたしました。関係各位の御協力によって、先般発刊いたしました報告書「大道上遺跡」のような立派な文献として記録保存ができたのであります。

引続いて、北信土地改良事務所担当の中子塙境遺跡の発掘を、昭和51・52の両年にわたって実施しました。昭和51年、第1次発掘は、関孝一・郷道哲章先生・昭和52年、第2次発掘は、金井汲次・桐原健先生の御指導によって実施しました。先生方の綿密な計画とともに適切な御指導と町の郷土史の会員、須坂園芸高校社会科クラブ員等の御協力を得て、短期間に、しかも事故もなく、発掘調査が完了し、更に、そのまとめとして、このような立派な報告書ができましたことを心からよろこんでおります。このように、優秀な結果で発掘調査が完了したのも、関・金井・桐原・郷道の各先生方の御尽力は勿論のことですが、関係官庁係官の理解ある御配意と発掘に当られた多くの人々の御協力の賜物であり、ここに改めて感謝申しあげます。

この報告書が、郷土の歴史解明に役立ち、活用されることを念じて序といたします。

昭和53年1月23日

小布施町教育委員会教育長

高見本治郎



## 序

今般広域営農団地農道整備事業の施行にあたり、小布施町大字中松字宮浦一帯に埋蔵されているとされる、中子塚跡および宮浦遺跡と云う埋蔵文化財の一部が破壊されるおそれがあるため、これを小布施町教育委員会に委託せるところ、同町教委におかれましては、農繁最盛期であり且短時日の発掘作業施行等々諸般の状況最も困難を極めた中にもかゝわらず、いち早く最高のスタッフを編成せられて、最大の成果を収められ、該地方における古代史の解明に偉大なる貢献を成された事は誠に御同慶にたえないところであります。ここに調査団の各先生方並に公私共に多大なる御尽力を賜わりました地元関係者の各位に対しまして、深甚なる敬意と感謝の意を表しまして簡単ながら刊行の序といたします。

昭和53年1月23日

長野県北信土地改良事務所長

岡 田 謙 一



## 例　　言

1. 本書は長野県須高地区広域農業団地農道整備事業にともなう、小布施町中子塚境遺跡の発掘調査記録である。
2. 本調査は小布施町教育委員会が北信土地改良事務所より委託されて、昭和51年9月末から昭和51年11月末（第1次）と昭和52年7月末から昭和52年8月末（第2次）にかけて実施したものである。
3. 発掘調査及び遺物整理は関孝一（第1次）と金井汲次（第2次）が責任者となり、市川健夫・桐原健・鶴道哲章・小泉克夫・須坂園芸高校社会科クラブ員・小布施町郷土史会々員が主となって行なった。
4. 出土遺物・調査記録は小布施町立歴史民俗資料館で保管している。
- 遺物の実測と図版作製は鶴道（第1次）桐原（第2次）写真と遺構等の図版作成は関（第1次）金井（第2次）が担当した。
5. 本書の執筆にあたっては、Ⅰは事務局、Ⅱは金井、Ⅲについて第1次は関、第2次は桐原、小泉、Ⅳについて第1次鶴道、第2次桐原、Ⅴは関、金井が分担した。



## 目 次

序	小布施町教育委員会教育長 高見本治郎	1
序	長野県北信土地改良事務所長 岡田謙	3
例 言		5
目 次		6
挿 図 目 次		6
図 版 目 次		7
I はじめに		8
第1次調査		8
第2次調査		10
II 遺跡の立地と環境		13
III 遺 蹤		17
地 形		17
第1次調査、遺構		18
第2次調査、遺構		26
IV 遺 物		33
第1次調査		33
第2次調査		38
V 結 び		45

## 挿 図 目 次

第1図 第1次調査グリッドの設定	8
第2図 教育長の视察（第5号住居、竪）	12
第3図 小布施畠状地形	13
第4図 遺跡付近地図	16
第5図 小布施畠状地をのぞむ	17
第6図 中子塚境遺跡全図（第1次調査）	18
第7図 第1～4地区グリッド土層セクション	19
第8図 第1号住居址実測図	20
第9図 第1号住居址竪	20
第10図 第2号住居址実測図	21
第11図 第2号住居址全景	21
第12図 第3号住居址宋銭出土状態	22
第13図 第3号住居址実測図	22
第14図 第2土壤実測図	23

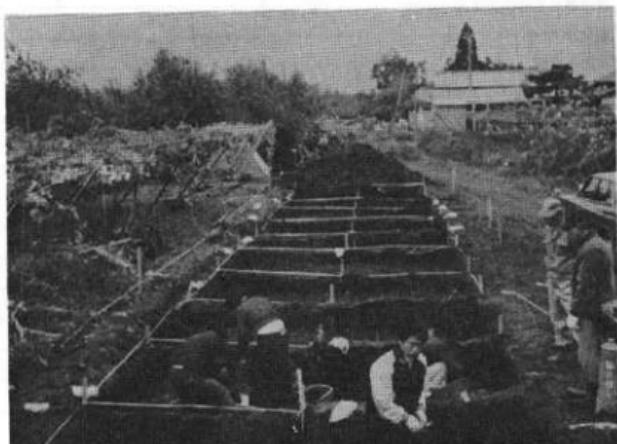
第15図 第2土壤全景	23
第16図 第3土壤実測図	24
第17図 第3土壤全景	24
第18図 第4号住居址実測図	25
第19図 中子壕境遺跡全図(第2次調査)	26
第20図 第5号住居址全景	27
第21図 第5号住居址実測図	28
第22図 第5号住居址竪実測図	29
第23図 第5号住居址土器出土状態	29
第24図 集石址全景	30
第25図 鉄斧頭出土状態	30
第26図 瓢状土器出土状態	31
第27図 土器集積址全景	32
第28図 勾玉出土状態	32
第29図 第1・第4号住居址出土遺物実測図	34
第30図 第1次調査住居址外出土遺物実測図	35
第31図 第5号住居址出土遺物実測図	38
第32図 グリット	39
第33図 C <sub>10</sub> グリット出土遺物実測図	40
第34図 土器集積址出土遺物実測図	42
第35図 集石址・その他出土遺物実測図	43
第36図 土器集積址出土遺物	44

### 図 版 目 次

1 第4号住居址(竪上 遺物出土状態・下 竪遺構)	47
2 第2土壤(上 全景・下 遺物出土状態)	48
3 第5号住居址(上 全景・下 竪)	49
4 土器集積址	50

# I はじめに

## 第1次発掘調査



第1図 第1次調査グリットの設定

須坂市と中野市を結ぶ広域農道の建設工事は局所において着手され、かなり進行している。その間、小布施町では扇状地の古代集落遺跡を南北に分断することになり、大規模な発掘調査による保存措置が必要とされていた。

昭和51年になって、いよいよ小布施町にかかるルートの工事が始まることになり、まず、5・6月にわたって大道上遺跡の発掘調査が実施された。結果については調査報告書「大道上遺跡」(小布施町教育委員会)のとおりであるが、古代集落の南限にあたり、集落範囲を把握する上で貴重な資料を得ることができた。

大道上遺跡の北側にあたる扇状地の末端部は中子塙境遺跡である。かつての千曲川後背湿地である延徳田圃の汀線に接し、住居跡の分布が最も濃密な所とされている。現に表面採集された遺物だけでもおびただしい数量にのぼる。

ところで、この中子塙境遺跡にかかるルートの施工は昭和52年度の予定であった。それが昭和51

年9月になって、同和対策事業との関係から、急拠、一部工事が年度内に行なわれることになった。

しかし、この急な計画変更に対して、発掘調査体制を組織することは容易なことではない。とりあえず、町教育委員会は着工予定地を下見し、それほど大規模な面積にならないことを確認した。こうして、中子塚跡にかかる同和対策事業工事分の発掘調査は、昭和52年度に行なわれる予定の調査地と分離した形で実施されることになった。

したがって、今回の調査を第1次発掘調査とし、肌寒い秋冷の時期に、休日を返上しての発掘調査を実施した。ここに当初の目的を達したのは、ひとえに調査参加者の協力があったからであり、記して感謝の意を表す次第である。

#### 調査団の編成

調査会責任者 高見本治郎

事務局 堀込綱利・荒井 登・金井文司

#### 調査団

顧問 市川健夫

調査団長 関 孝一

調査員 高橋和太郎・松本小市・梨本大吉・郷道哲章

調査補助員 長針 功・橋本武治・西沢新治郎・松本利輔・宮沢彰一・北村政太・市村耕一・池田富男・中条忠市・市川慶太郎・岩崎小弥太・丸山正志・荒井よしひ・小林裕・宮沢正一・飯沼正治・本間文太・小林百枝・小林暢夫・池田実男・市川れい・山岸徳治・今井一郎・田中弘子・田中浩一・小林宏・小林まさみ・板倉進・小林博・永井俊幸・岡村謙・綿貫貞文・関博・齊藤彰一・田村良行・小林秀子・山本敬子・吉池寿一・山上茂治・丸山公祥

調査協力者 小布施中学校生徒15名

#### 調査日誌抄

10月2日（土）公民館において、発掘調査事前打合会を行う。町教委関係者、調査団長以下調査員、学生が参集し、調査団の結成。

10月10日（日）曇後雨の惡天候について発掘を開始する。まずグリットを設定し、全体を4つの地区に分け、第1地区は南側の地点、山下名美之助氏宅前、第2地区は、小林幸吉氏所有のブドウ畑東隣、第3地区はその北側中村功氏所有のリンゴ畑東隣、第4地区は北側の地点小林義雄氏宅西隣である。作業はまず第1及び第2地区的表土から開始。第1地区では6グリット発掘したが川砂層にぶつかり、作業を切り上げる。遺物包含層である黒色土は浅く、出土遺物は僅少。第2地区では22グリットを発掘し、黒土層の上まで掘る。（第1図）

10月11日（月）曇天の肌寒い日である。第2地区では昨日の作業を続行する。第3地区的発掘を開始。8グリットの表土層を掘るが、黒色土になってしまっても遺物の出土が少なく第2地区よりも疎が

多い。第4地区の11グリットを掘ると、地層の擾乱が著しいが、出土遺物が多い。1部地層の明確なグリットがあり、明日調査予定。地元の話では、第4地区的地点はかつて水田になっており、トロッコで埋立てたという。北側約50mの電車線路の近くに水車小屋があって、発掘地に沿って流れている用水路の水を利用していったとのこと。第1地区的全体測量、及び土層のセクションをとる。

10月12日（火）久し振りの快晴、今日は集中的に第2地区的発掘を行なう。南側において黄色土を切込んだ落込みがみられたが、地層的には明確な把握はできなかったが第1住居址とする。各グリットの黒色土を掘りあげたところ、中央部あたりで落込みらしきものを発見したが遺物は少なく、また、北側のグリットでは、土壌の落込みがでてくる。発掘は明日に持ち越す。

10月13日（水）晴天、昨日発見された中央部の落込みをさぐると、宋錢、灰胎の出土があり、この落込みどのような性格をもつものか不明で、単なる方形の浅い落込みであった。土壌を完掘する。大きな長方形の土壌と小さな円形の土壌2つが隣接して露呈する。長方形の土壌からは土師器と鉄器が、また円形土壌の1つからは完型の浅鉢が2個、その他土器片が出土する。もう1つの円形土壌にはぎっしり炭がつまっており、火をもす行為の形跡がうかがわれた。

10月17日（日）晴天にしては肌寒い日である。第3地区発掘を集中的に行なう。その間に第2地区的写真及び測量を行う。第2地区的南側グリット壁を削ったところ、壺の石らしいものが発見されたので拡張することにし、第3地区ブロックの発掘を中止、土はぎにかかる。

10月23日（土）晴 第2地区南側に露出しはじめていた石組壺を中心に掘り拡げる。壺の焚口が北にあると思われたが逆であった。壺を中心に住居の落込みがあるわざかな部分を掘る。第2地区的セクションをとる。第3地区では黒色土を全部はぎ、下の黄色砂礫層に落込んだ遺構をさがすと2つの土壌が発見されたが、中からは遺物を検出することができなかった。第4地区は今まで途中まで掘って中断していたが、土層の安定している北側の3つのグリットに着手する。黒色土をはいだところ焼土が出土する。

10月24日（日）晴 第2地区的南側にでている石組壺に伴なう住居の落込みを追うため、西へ拡張する。完了せず次回に持ち越す。第3地区的写真と測量を行なう、北側の狭いグリットでは、小さなピットが2個発見され、その1つから完形に近い土師器が出土する。第4地区では焼土について石組壺が出土する。住居址の落込みを追うが土層は不明確なため把握できず次回に持越す。

10月31日（月）晴 第2地区と第4地区的壺及び住居址の発掘を継続する。完了後記録する。一部遺物整理を始め、小布施町立歴史民俗資料館で11月3日5日、2日にわたり復元、実測を行なった。

## 第2次発掘調査

調査に至るまでの経過は前述のとおりであるが2カ年継続事業で第1次（昭和51年）に次いで昭和52年度に実施した。

第1次調査は肌寒い秋冷の時期に多大な成果を上げ11月末終了。

時期は平安時代末や鎌倉時代にかかる遺構、遺物を検出した。古代集落の立地は時代によって、集落の位置が変動していたかも知れないという推定がなされ、第2次発掘調査に多大な期待がよせ

られた。

北信土地改良事務所より発掘の要請によって当教育委員会において、発掘調査の諸般の準備を整えた。学生・生徒の協力を得るため真夏の夏休みに集中調査を実施することとした。幸にも多数の調査補助員の協力を得る手はずがととのえられ、第2次発掘調査の運びとなった。

#### 調査団の編成

調査会々長 高見本治郎

事務局 堀込綱利・金井文司

調査団長 金井汲次

調査員 桐原 健・小泉克夫・関 孝一

調査補助員 池田富男・中条忠市・北村政太・岩崎小弥太・宮沢彰一・橋本武治・荒井よしゑ・

荒井政人・高田孝雄・依田芳也・小林俊次郎・宮入直美・小林康子・酒井裕子・横山康永・佐

々木一雄・松井幸成・中河孝夫・高橋秀夫・山岸規男・山上茂治・山岸和昭・丸山寿一・落合

啓良・佐藤芳正・市川文彦・相馬一徳・原隆・池田義人・阿部仁士・山本隆子・小林礼子・牧

文子・中村恵美子・中沢登志子・羽生田一徳・丸山浩・黒岩則子・松沢則子・川上理・黒岩八

重子・一色六都雄・前角和大・黒岩浩明・松本司・倉石和彦・富田武・太田博光・荒井桃江・

片桐敦・藤井美技・西沢新次郎・小池久男

#### 調査日誌抄

7月16日（土）晴 公民館において、発掘調査事前打合会を開催する。町教委関係者、調査団長以下調査員、小布施町郷土史研究会役員、学生、生徒代表等が参集し、調査の趣旨、方針、方法等について研究協議をした。

7月21日（木）晴 日本上空に寒気流があり、真夏には珍らしく涼しい一日であった。A地区の草刈りをし、グリット（2×2m）を設定し、83のグリットの杭打ち、縄張りを実施する。

7月22日（金）晴 B・C地区の草刈り、用地内にある果樹の伐採をし、グリットを設定。A地区南端にテントを張り、発掘器材を運搬する。午後は炎暑となり作業は難渋した。

7月26日（火）晴 調査団本部のテント前へ9時に集合し、主催者のあいさつ、団長の調査計画、調査主任の細密な調査方法についての説明が行われた後、A地区の主としてA列を中心に発掘を開始。昨夕の俄雨のため大地はほどよく温めり、シャベルや鍬は意のまゝに土をうごかすことができ、夕刻までに26グリットを仕上げることができた。かつて水車施設のあった場所のためか土層は攪乱され、土師細片が少量検出されたのみであった。しかしC-18グリットでは石組壇の一部と思われる遺構が検出された。

7月27日（水）晴 A地区B・Cの発掘に集中。石組壇を中心に拡張すると夕刻までに住居址の全貌が略々確認することができた。北壁に石組壇を持つ、一辺の長さ6mの鬼高窓竪穴住居で、高杯・盤等の遺物も検出された。C22～23地区では集石遺構が露呈はじめ、礫群の間からは巴紋をもつ軒先丸瓦片も発掘された。



第2図 教育長の視察（第5号住居・竪）

7月28日（木）晴 朝は涼しかったが日中は水銀柱が昇り、ついに33度という炎暑となり、調査団員は一日中汗にまみれて作業を続けた。鬼高期の隅丸長方形住居址の検出に力を注ぎ、遺物を取り上げて柱穴を探したが、土質がもろいためか確認するまでにはいたらなかった。壁も砂質の土層のため不鮮明な部分があった。石組竪は自然石を用い、よく残存していた。（第2図）

集石遺構では鉄器片や、古銭片も検出されたが、酸川の硫化鉄の影響による腐蝕のため古銭の形態は不明であった。

B—C—15地区では高杯の脚破片の検出が多かった。

7月29日（金）晴 昨日に続き炎暑。学生・生徒諸君は汗と土塵にまみれて終日よく作業を続けてくれた。

C地区においてもグリットの試掘を続けたが遺構も遺物も全然存在しなかった。B—C—10からは扇状に潰れた瓶状土器で把手が付され、底部に近いところに小孔のある珍しい遺物が単独出土した。

B—C—15を拡張すると高杯片・甕片と共に壺、手づくりね土器片が検出された。出土範囲は径3mの円形となった。この地区から更に東へ2mの所からは、扁平滑石製勾玉1個を発掘した。

7月30日（土）晴 水銀柱はついに34度。各遺構の清掃をすすめ写真撮影をし、測量をする。B—C—15からは劍形石製模造品の破片を1点検出し、歓声があがった。

午後は各グリットの埋めもどしをし、団長は「遺跡と歴史環境」調査主任は「発掘の成果」について概説を行った後、一同記念撮影をすませ発掘調査を終了する。

7月31日（日）晴 地形の全体測量。発掘器材を撤収し、テント等をはずして現地をひきあげる。

発掘後の遺物整理は、8月1日～8月4日まで小布施町立歴史民俗資料館で実施し、復元、実測は同所で8月5日～8月11日までにわたって行なった。

## II 遺跡の立地と環境

小布施扇状地は、善光寺平の東縁にあって、上信火山帯から流れる松川（長さ21km）によって形成され、扇頂は標高約400mの上松川付近で、西北へ向って緩傾斜に展け、扇端部の等高線は凡そ332mである。西端は千曲川と接し、北端は延徳田圃に接続して、雁田山地を除いては、略々平坦地で、農業生産地と住宅地となっている。住宅地のほとんどは小布施扇状地の上に立地している（第3図）。

高山村を流下する松川は、比較的深い峡谷を保つが雁田山地の西麓を過ぎると平地へ躍り出た松



第3図 小布施扇状地地形

(1 : 50,000)

川は荒れ川となる。近世初頭、安芸から移封された福島正則は、治水事業に力をつくして現在の流路に固定したと思われる「千両堤」は町の文化財に指定されて、その一部が保存されている。往古は扇状地面を自由奔放に流下し、また幾度かの氾濫によって多量の土石の堆積を繰り返しつつ、いくつかの乱流路が形成された。このことは現在の用水路網によっても理解される。

松川は酸性度(pH 4)が極めて高い酸川で、土も石もそぶに染まって茶褐色を呈しているが、その原因は上流の火山帯の硫黄が自然溶解にもとづくものであるとされている。さらに、汚染度を増した原因に硫黄採掘鉱業の盛行があげられる。硫化鉄を多量に含有するため飲用水に適さないのは勿論農作物の栽培にも影響を与えていている。

以上、荒れ川・酸川という二つの悪条件は小布施扇状地上における遺跡の立地の在り方にも大きな影響をもたらしているものと思われる。小布施の遺跡分布については幾度かの綿密な調査が実施され、今までに判明しているものの数は①旧石器時代1 ②縄文時代13 ③弥生時代24 ④古墳45(うち積石塚40) ⑤古代36である。その多くは複合遺跡で、遺跡の実数は46(古墳は除く)となっている。

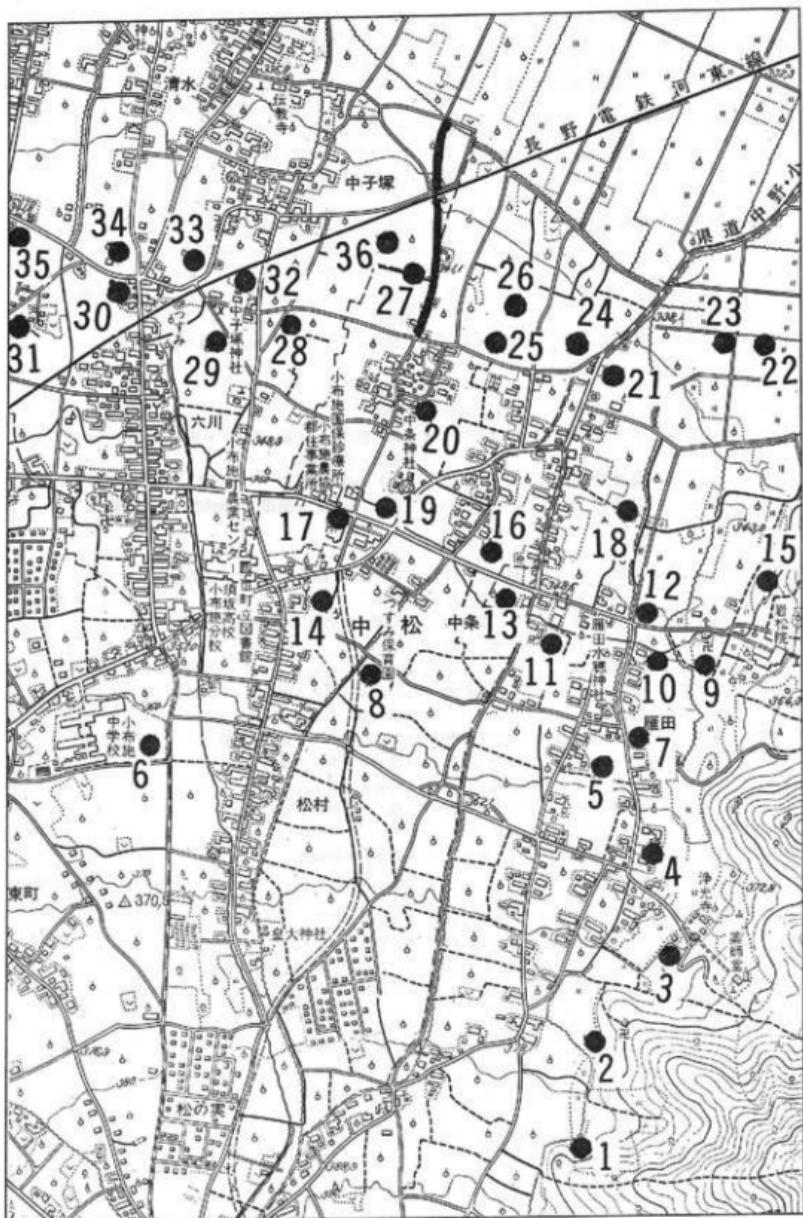
遺跡の最も密集する地域は雁田山麓で、旧石器時代から古代まで的一大集落跡である。特に最近清水端遺跡(縄文晩期)の発見は注目すべきものである。この種の遺跡は川辺に立地するもので、その当時は、この地域にサケやマスの遊行するほど流れのあったことが想定される。次いで扇状地の北面の扇端部で、延徳田園に接した三日月形に集落が展開し、特に弥生時代から古代へかけての遺構・遺物の多い所である。千曲川の後背低湿地である延徳田園周辺において、赤生時代中期から汀線農耕が開始され、その後時代の進むにつれて、生産用具の発展から開拓が進展したものと推定される。これ等に比して扇状地西側は遺跡の分布は稀薄である。

次に中子塚境遺跡周辺の様相を第4図に示し、その図版番号をとって、概要説明をした表を掲げよう。

なお、表中の36についてもう少し詳しく述べると、本遺跡から西方約40mのところに大字中松字中子塚境1250番地があって、以前に銅造觀世音菩薩立像(重要文化財・高さ41.2cm)が出土し、吉沢家で堂宇を建立して安置していたが、昭和初期に、上田市塩田の長福寺へ移され、現在は信州夢殿の本尊となっている。像は奈良時代和風の作とされており信州最古の仏像が本遺跡近傍から出土していることは注目すべきことである。(第4図)。

図版番号	県登録番号	遺跡名	所在地	遺跡の状況及び出土品	備考
1	9415	赤はげ	雁田赤丸	(旧)ポイント・振器、(縄)石鎌・石斧・打石斧・須恵器 (縄)磨石斧・打石斧	無柄鐵多
2	9414	最明寺	〃 最明寺		
3	241~6243	葉御堂古墳群	〃 清水端他	古墳4基(円墳)、儀仗	
4	9406	清水端	〃 清水端	(興中~晩)土器・石鎌・石鎌・石斧・打石斧・磨石斧・凹石・石皿・すり石・石棒・石劍・石製垂飾品・土版・石棒状土製品・耳飾	

5	6213	中通 大日堂古墳	〃 中通 小布施大日堂	須恵器、師土器、(繩)鐵石 方墳、現存せず	
6	9405	宮林	雁田宮林	(繩)磨石斧・打石斧・石鎌・石匙・四石、 (弥後)土器、土師器、須恵器、灰釉陶器	
7				土師器、須恵器	
8	9424	母子塚	中松母子塚	縄文土器、須恵器	
9		岩松院下	雁田	(繩)打石斧、(弥)大型始刃石斧、土師器	
10	9416	雁田宮下	〃 宮下		
11	9425	雁田上町	〃 上町	(繩)磨石斧、土師器、須恵器	
12	9403	木下	〃 木ノ下	(弥中)土器、土師器、須恵器	
13		西町	〃 西町	(繩)磨石斧、打石斧	
14	9417	大道上	中松大道上	(弥後)土器、土師住居址、土拭、土師器、 須恵器、縁	昭51年4月 ～6月発掘
15	9404	飯綱前	雁田飯綱前	(弥中・後)土器、土師器、須恵器、内耳土 器	
16	9407	町裏	中松町裏	(弥後)土器、土師器	
17		久保畠	〃 久保畠	土師器	
18	9426	中条中町	雁田中町	(繩)磨石斧・石鎌(弥後)土器、土師器、 須恵器、内耳土器	
19	9411	御蔭屋敷	中松宮添	(弥)大型始刃石斧	
20	9400	中条宮下	〃 宮下	(弥後)土器、土師器、灰釉陶器、内耳土器	
21	9409	中条下町	雁田下町	(弥)有孔石劍、土師器、須恵器	
22		木戸脇	雁田木戸脇	須恵器	単独出土
23	9427	唐根田	〃 唐根田	土師器、須恵器、内耳土器	
24	9408	立石	中松立石	土師器	
25	6250	古堂塚古墳	〃 古堂	方墳(径33m高3m)直刀・土師器	
26	9401	中条堀回	中松堀回	住居址1(隅丸形6.35×5.70m)、古式土 師器(甕・瓶・壺・高杯・盃)	昭28年11月 発掘
27	9398	〃 中子塚境	〃 中子塚境	(弥)土器、土師器、須恵器	
28	9399	孤塚	都住孤塚	(弥中)土器、土師器	
29	9402	宮上	都住宮上	(弥後)土器、土師器	
30	9397	三田町	〃 三田町	(弥)大型始刃石斧、土師器	
31	9410	〃 東川原	〃 東川原	土師器、灰釉陶器	
32	6251	桃子塚古墳	都住宮浦	円墳(径16高1.3m)	填上に神社 鎮座
33	9423	道添	〃 道添	土師器、須恵器	
34	9412	立場	〃 立場	土師器	
35	9420	松宮	〃 松宮	(弥)大型始刃石斧、土師器	長福寺(上 田市塙田)蔵
36		中子塚境	中子塚境	鉄造觀世音菩薩立像(奈良時代)	



第4図 遺跡付近地図

(1 : 10,000)

### III 遺跡

#### 地形

中子塚境遺跡は小布施扇状地の北斜面の扇端に位し、標高は331～348mに亘る。

広域営農団地農道整備事業（須坂市一小布施町一中野市線）の改良にともなう記録保存調査で、地域は南北約400m巾約20mの範囲である。その大部分は旧来の道路の拡幅であるが、長野電鉄線の北側から延徳田園へ至る区間は新設工事である。

松川から生活用水・灌漑用水として放射状に10数条の用水堰が開かれているが、本遺跡は中条西線の堰筋にあたっており、原祐氏の教示によると、かつては、この堰を利用して8軒の水車小屋が所在し、精米・精粉のほかに菜種油しぼりが盛行した由である。用水が潤沢であるとともに

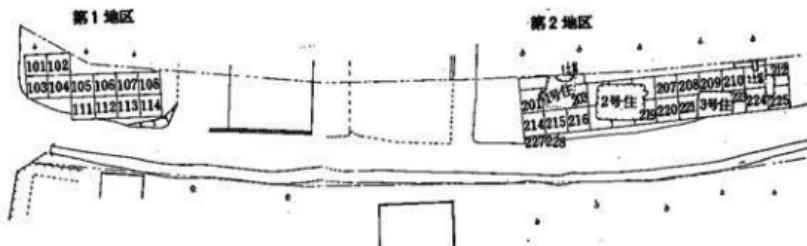
に、扇状地の傾斜角度から適当な落差によって水車が稼動したわけである。また硫化鉄分を多量に含む用水は、施設・用具の耐用年数を長くしたためでもあった。昭和初期から電動の精米所が隆盛となって水車は全部廃絶してしまった。

本遺跡の西方約100～120mの所に、或る時は相当の流量を持ったと思われる乱流路の旧河床が凹地となって残存している。本遺跡近傍の中条西堰の周辺も微低地となって、これも小さな乱流路の跡と見てよい。この微低地も長野電鉄線の所で消えているが、鉄路は大正9年（1920）に新設されたが、その折に鉄路は土盛りを行ったため、地形に変貌のあとがみられる。鉄路の北側は地字を「下谷地」と呼び、或る時代は原野であったことを示す地名である。前述の中条西線の用水はこの地域を貫けて、地字「中条沖」へ注いで灌漑用水の役割を果していた。しかし、最近の延徳団園の用水は千曲川から揚水するようになり、中条西線は用水堰としての機能を失い流量を減少するにいたった。そのうえ家庭雑排水のため汚染は進んでいる。

本遺跡に隣接した地域で、扇状地の傾斜面は松の実団地2.4度、大道上遺跡付近1.5度、当遺跡でC地区1度となり扇頂から扇端へ向うにしたがって緩傾斜となっている。（第5図）第1次調査地では大小の円礫・角礫が見られたが第2次調査地では稀に小礫が観察する程度で、畠地の耕土は深く良質土壤となり、肥沃な果樹園地帯となっている。



第5図 小布施扇状地をのぞむ



第6図 中子塚跡遺跡全図 (第1次調査)

### 第1次調査 遺構

第1次発掘調査は道路建設予定地に該当する南北180mの間を、4地区に分けて実施した。すなわち、南側の道路取付部分にあたる畠地を第1地区とし、12グリット、中間地点に第2地区・26グリット及び第3地区・12グリット、北側の端部に近い荒地を第4地区として18グリット、合計68グリットを設定した(第6図)。

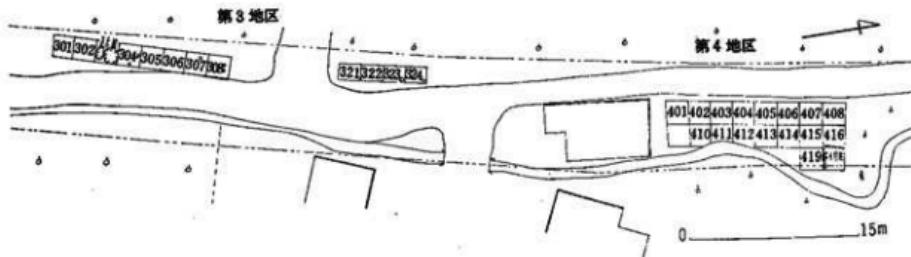
発掘面積は約250m<sup>2</sup>となり、家屋・既設道路・用水堰を除く発掘調査地の約90%を発掘したことになる。以下、第1地区から順次その概要を述べておきたい(第6図)。

第1地区 畠央部に最も近い地点であるが、地層の状態をみると、遺跡の地山層となる砂礫層までの深さが1m～80cmあり、後述の第4地区と同じく深い。土層は地山までの間が6層に分れる(第7図)。遺物包含層にあたる黒褐色粘土質土層は地表下約30cmの深さにあるが、ここからの出土遺物は皆無に等しかった。

小布施のいわゆる三日月状遺跡分布の密集地にあって、ほとんど遺物が検出されなかつたことは、今後の問題として検討する必要がある。この地点が、扇状地を流下するかつての松川の枝流にあたっていたかどうかは、この土層状態では判別しがたい。

第2地区 この地区周辺から遺物が出土していることは、以前からしばしばあったらしい。近隣の畠地なら、どこを掘っても出るという。まさに古代小布施の三日月状集落地帯をしのばせる。ただ、残念なことに、ここグリット設定地は以前から農業耕作などで激しい擾乱をうけており、調査においても、やはり包含層である黒色土層以上はほとんど破壊された状態であった。しかし、表土と黒色土層との間に、黄色砂質土層が部分的に残っていた点を考えると、第1地区的土層状態と同じく、表土の下に黄色土の層があって、黒色土に続くものと思われる。この地区での地山(黄色砂礫層)までの深さは約60cmあり、第1地区より浅い(第7図)。

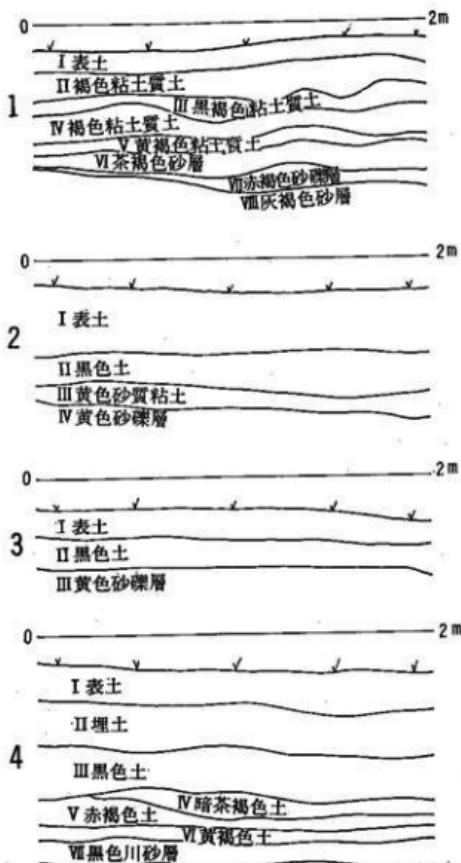
この地区での遺構としては、住居址3、土壙2を数える。それも、完全な姿で発掘されたのは第2土壙のみである。砂礫層を深く掘込んでいるため、破壊をまぬがれたといえる。その他は部分的に遺存しているものばかりである。



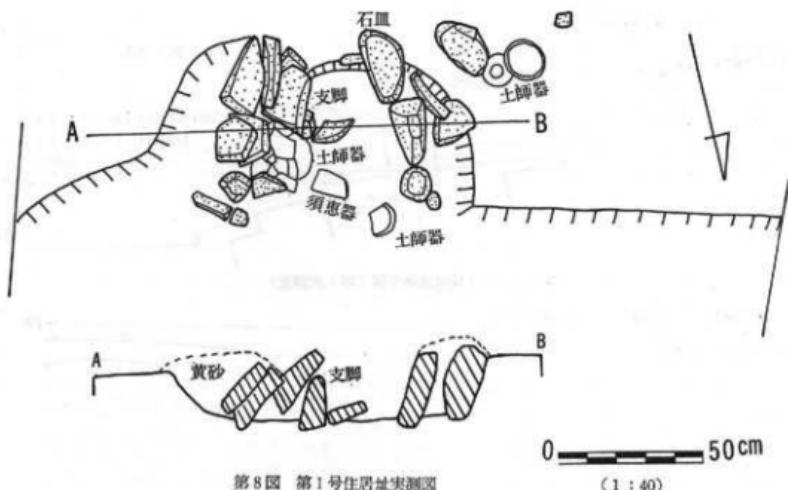
第6図 中子環境遺跡全図(第1次調査)

第3地区 小布施の土師集落を形成した生産の背景は、広大な延徳低湿地帯であると考えられる。稻作農耕の生産的骨格を考えあわせると、遺構は層端に近くなるほど密度を増し、扇状地と低湿地の汀線付近では、住居址等にかわって水田址的な生産遺構が秘められているものと推定されるのである。そうしたことから、第3地区は第2地区以上に遺物の出土量も多く、遺構も続出するであろうと期待したが、結果は第2地区に近接しているにもかかわらず、激減しているのである。遺構は第3土壤と小ピットのみである。遺物の出土状態も第2地区のように普遍的に出土せず、遺構周辺に単独出土的に認められた。地山の砂礫層までは約30cm、発掘地の中では最も深い所である。(第7図)

第4地区 荒地の用水堀が曲流する、条件の最も悪い地点にグリットが設定されたわけであるが、グリットによつては地表下1mまで擾乱をうけている所もある。この地点は以前に埋立てが行なわれたと聞くが、表土の下にその埋立土層があり、統いて遺物包



第7図 第1~4地区グリット土層セクション



第8図 第1号住居址実測図

(1:40)

含層の黒色土となっている。グリットによつては、黒色土から地山まで、原地形の土層を残してゐる。そこでは他地区の土層と趣が大分異なり、低湿地特有の泥炭的性質をもつた土層が各層をなしている。なお、その深さは約1m~1.5mある。(第7図)

ここでの出土物遺は第2地区のように多量であるが、中には埋土に混在して運ばれてきた遺物も相当量ある。遺構としては、不完全ながら住居址1を検出している。

以上の4地区を概観していえることは、いづれも小布施の遺跡密集地にあっても、遺構あるいは遺物が普遍的に分布していないことである。このことは第1地区より更に扇央部に近い大道上遺跡についてもいえたことであり、小布施の三日月状遺跡範囲内の一般的なあり方として指摘できるのである。今後、更に集落遺跡内における遺構の分布のあり方について検討する必要があろう。

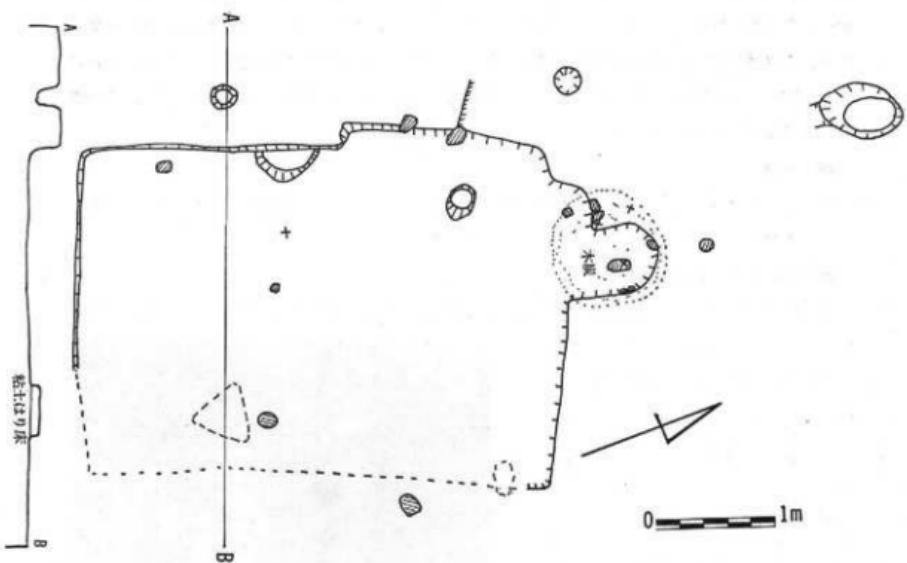
#### 第1号住居址(第8.9図)

比較的保存の良好な地点において、かまど部分が検出されたので、これを第1号住居址とした。かまど以外の住居壁や床面はほんの部分的に確認されたにすぎない。

竈は南側壁を巾約1.1m、奥行約50cm削り、両側に石組を構築したものである。発掘による



第9図 第1号住居址竈



第10図 第2号住居址実測図 (1:40)



第11図 第2号住居址全景

と、石組は倒壊した状態で出土し、奥部の右端には石皿が利用されていた。石組は主に30cm位の長形の石を2段に重ね、約30cmの高さに保ち、外側から黄砂土をはっていた。巾約50cm、奥行約50cmあり、中央部左側に自然石を利用した支脚石がおかれていた。竈内には薄い焼土灰と崩落した黄砂土が堆積し、土師器の一括破片や須恵器の大甕破片が出土した。住居外のかまど付近でも、土師器壊の完型品が2個出土している。

#### 第1土壤

第1号住居内の上部に残存する黄色土を掘込んでつくったもので、径1m、深さ50cmの楕円形をなす。土壤内からは土師器片のみまとめて出土した。

#### 第2号住居址（第10.11図）

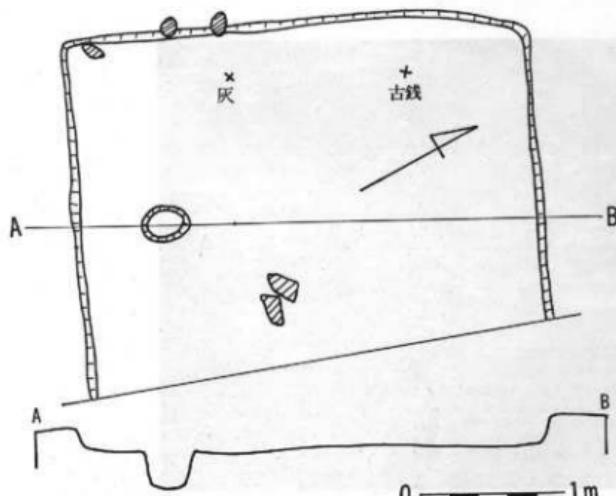
破壊によりあまりにも不明確な遺構であるが、粘土のはり床や柱穴、更に竈の残欠部に木炭片が検出されたことから、住居址とした。住居壁は約20cm以上ある。竈は北壁にあり、その先に煙道のような溝とピットがあるが、住居址と関係があるかどうか不明である。

#### 第3号住居址（第13図）

これも擾乱にあって明確ではないが、浅い跡が方形に半分ほど検出され、住居



第12図 第3号住居址宋銭出土状態



第13図 第3号住居址実測図 (1 : 40)

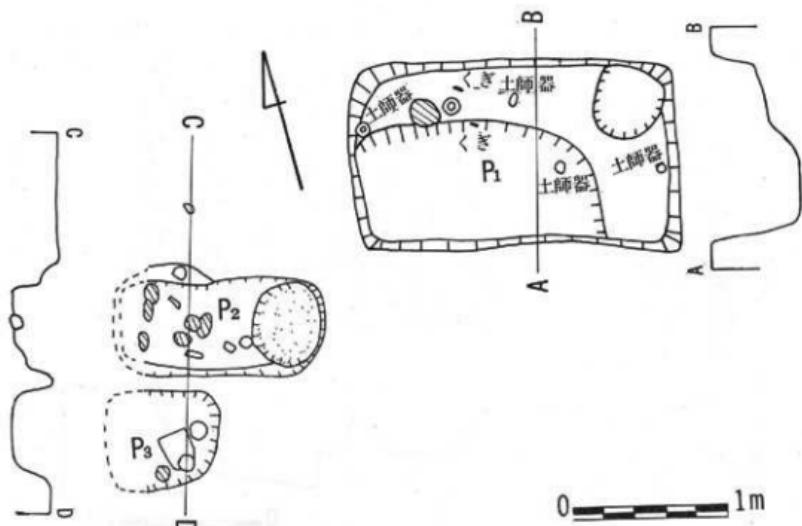
としてしつかえなさい。出土遺物では灰釉と宋銭が発見された。（第12図）

#### 第2土壤

（第14.15図）

今回の発掘中、最も保存度のよい遺構で、P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の土壤を一括して第2土壤とした。

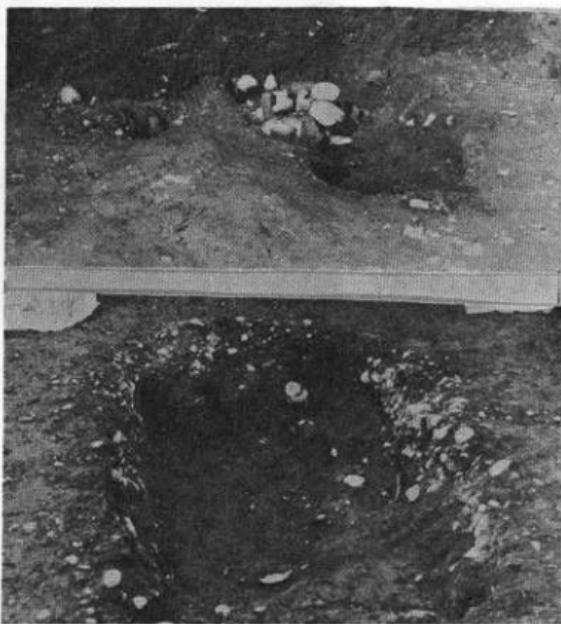
P<sub>1</sub>土壤は長さ2m、巾1.2mの長方形をなし、砂疊層を深く掘込んでいる。



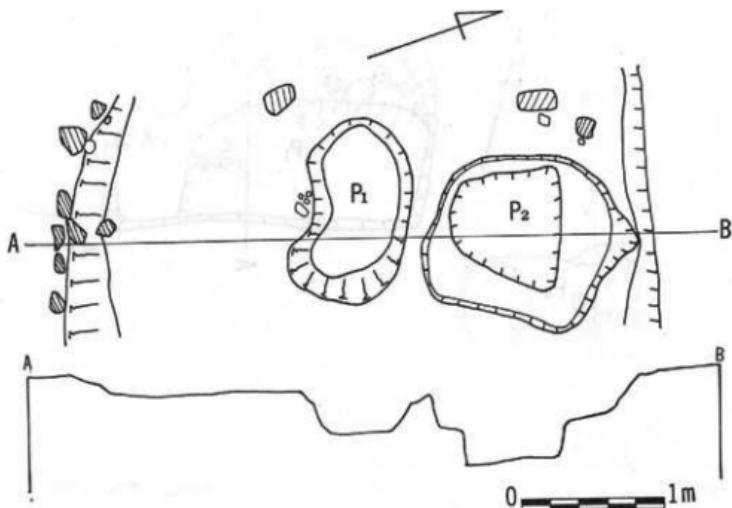
第14図 第2土壤実測図 (1 : 40)

土壤内は2段になり、深い所は砂礫層上面から60cm、浅い所で30cmある。土壤をいったん30cmの所まで掘下げ、更に長さ1.4m、巾80cmの方形に60cmの所まで掘ったと思われる。ここに棺を納めたであろう。遺物はくぎ2本、土師器5個体分が、浅い面に集中して出土している。

この土壤の西南部に近接してP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の小土壤が検出された。P<sub>2</sub>は長さ1.2m、巾60cm、深さ30cmの規模を有す



第15図 第2土壤全景 p.2, p.3 (上) p.1 (下)



第16図 第3土壤実測図 (1:40)

るものと思われるが、東隅には木炭がぎっしりつまつたピットを伴なっている。土師器の出土量も多く、土壤内につまっているような状態であった。木炭のピットを伴なう小土壤例は、大道上遺跡にもあり、P<sub>1</sub>の土壤に伴なうある種の機能をもった付属施設と考えられるのである。

P<sub>3</sub>もP<sub>2</sub>と同じ機能をはた

していたものであろうが、ここには木炭は認められず、土壤内一杯に土師器壺と杯が埋まっていた。土壤は長さ約70cm、巾60cm、深さ20cmの小規模なものである。

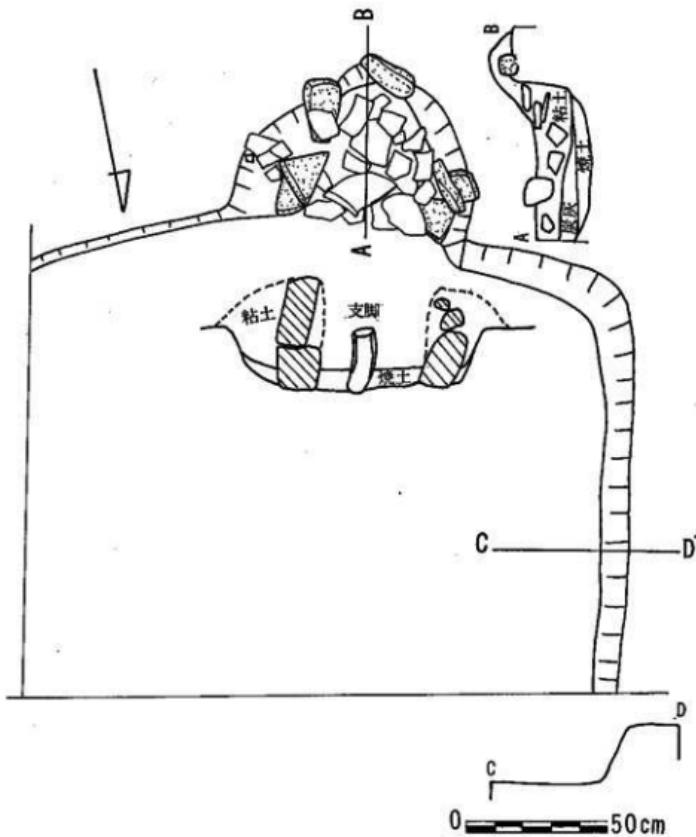
### 第3土壤 (第16.17図)

P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>の2つの土壤が検出されたが、第2土壤と較べると不整形な形態である。もともと、この地区的遺物包含層は浅く、遺物の出土量も少なかったが、この土壤周辺は比較的遺物が集中していた。

P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は共に並列しており、ことにP<sub>2</sub>の方は第2土壤のP<sub>1</sub>と同様に、砂礫層に2段の掘込みをし



第17図 第3土壤全景



第18図 第4号住居址実測図 (1:40)

ている点、あるいは共通したものであったかもしれない。

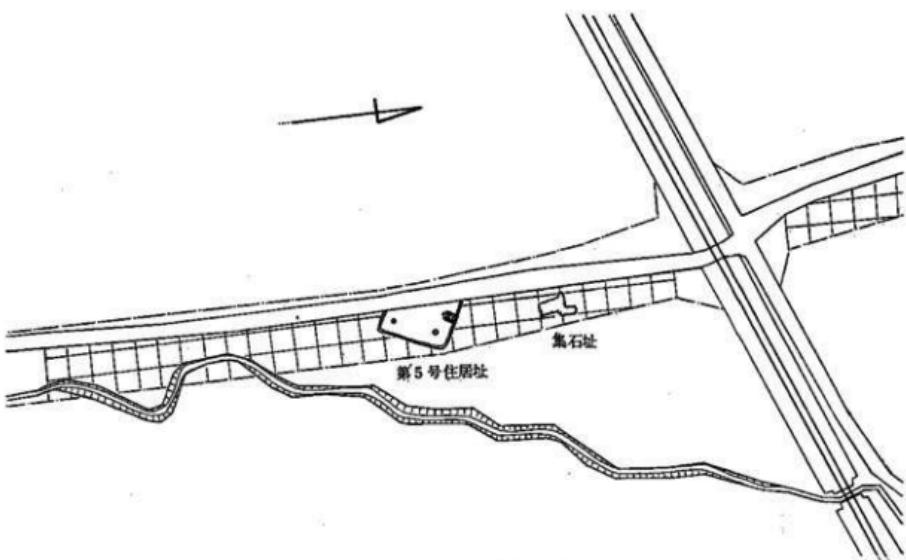
なお、深さは砂礫層の上面から約60cmあるが、土壤内からの出土遺物はほとんどなかった。

この第3地区においては、土壤以外にピットが遺構としてあげられよう。その中の1つのピットからは完形の土師器が単独で出土している。第3土壤とは無関係なものである。

#### 第4号住居址（第18図）

ここでも壁のみが明確に発掘されただけであり、住居壁は土層が軟弱なため、もろく崩れた状態であった。

かまどは第1号住居址と同じく、南側壁を巾約80cm×奥行約50cm削り、両側に石組を構築している。長形の比較的大きな石を2段に重ね、40cmの高さにし、更に外側及び石組の間を粘土で補強し



第19図 中子塙境遺跡全図（第2次調査）

ている。石組は巾約40cmあり、中央部には部分的に加工をしたと思われる立派な支脚石をおいている。かまど内は焼土・炭・灰が厚く堆積し、その中に土師器壺及び破片一括がぎっしりつまっていた。

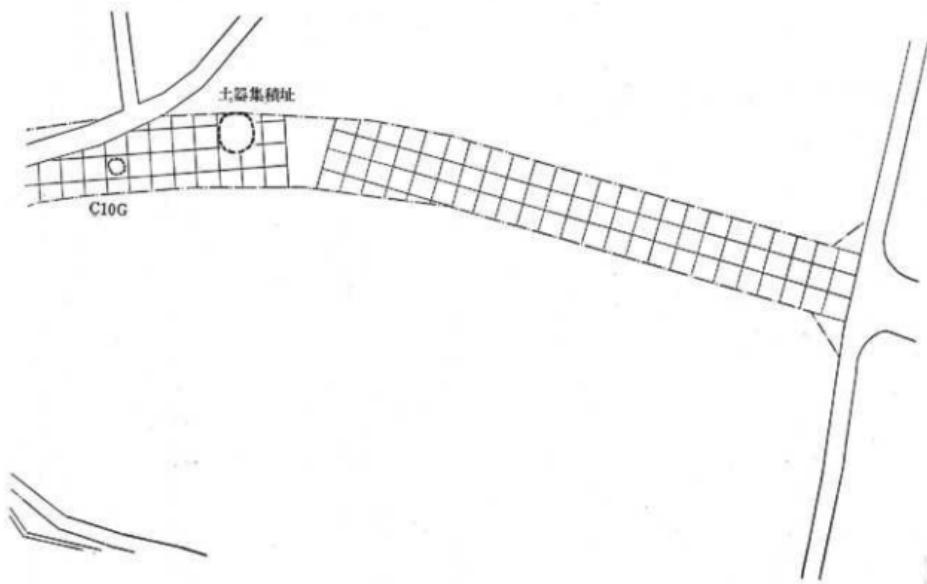
## 第2次調査 遺構

### A 地区

今回工事にかかる広域農道須坂・中野線のうち、長野電鉄踏切以南の60m間で、幅1.5mの農道を挟んで、東側は林檎、西側はネクタリンが植わっている。東側の林檎帯は4~6mと幅狭く、その東側には中条西塙が北に走っているが、かつては数台の水車を動かしたこの塙も、現在は水量を失い、家庭の雑排水のみ加わって汚なくよどんでいる。

新農道の幅は6mで、発掘範囲は360m<sup>2</sup>となるが、農道は現在使用されているため発掘はできず、又、西側は幅1m足らずの極く狭い範囲ゆえにトレッサの設定も叶わず、結局、東側の林檎ベルト内にグリットを設定するにとどまった。グリットは2m平方のもので、東側幅員を標準とし、西へA~C、北へ向って0から28番まで、グリット総数53のうち、37グリットを調査した。(第19図)

本地区の土層は比較的単純で、鷹褐色土層と黄褐色砂土層で鷹褐色砂土層は北に向うにつれて厚くなる。A0~A12までは、東方の塙が接近しており、かつて、土盛りをして水車を廻したとのこ



第19図 中子塚境遺跡全図（第2次調査）

ともあって、両層は不整合で、グリットによっては黒色土層や漸移層とも呼ぶべき層下に褐色砂土層が介入しているところもあった。A14～A21部分において、両層はほぼ安定しており、黒色砂土層の厚さは32～38cm、これがA23以北になると黒色砂土層は厚みを増して45cm以上となる。

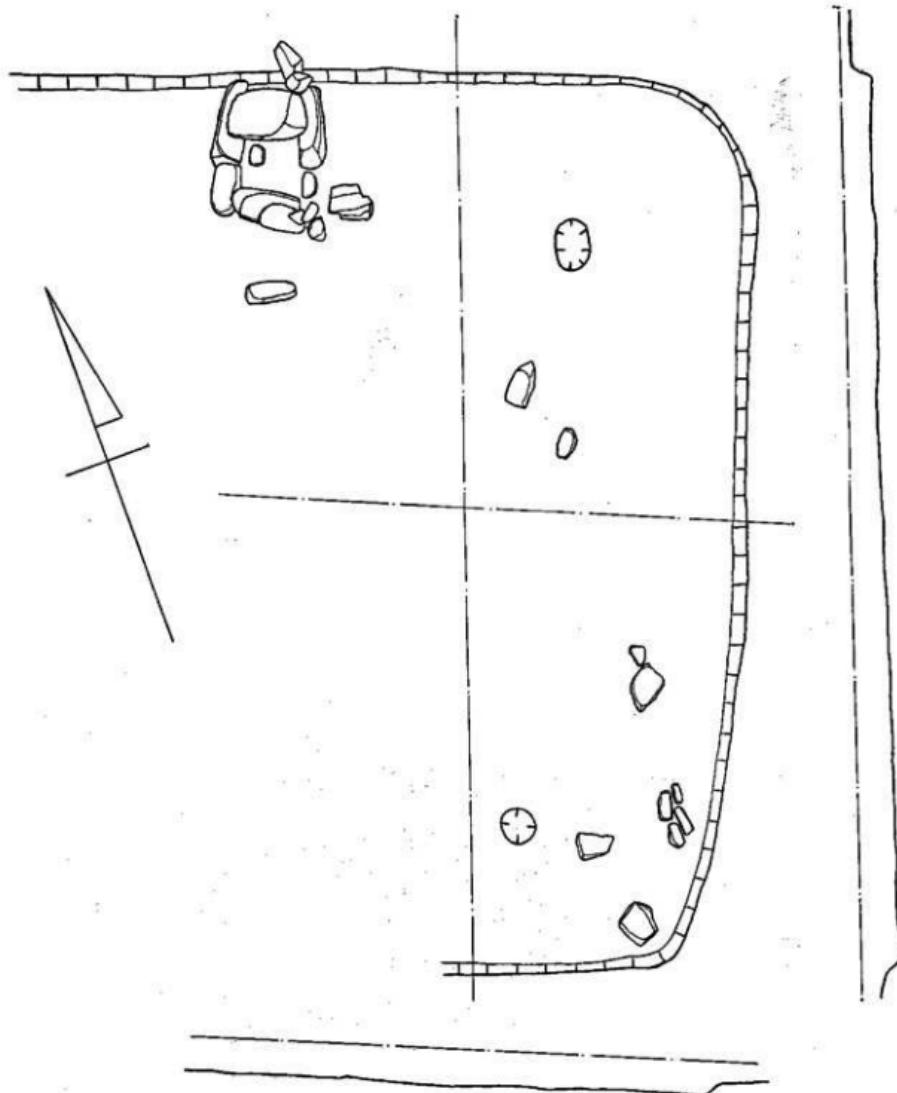
遺構は、土師期の5号住居址と集石址の2遺構のみ。遺物の発見も上記遺構周辺に見られたのみで、他は廖々としたもの、出土層位は黄褐色砂土層直上である。

#### 第5号住居址

層序の安定している15～18のA・Bグリットに発見されたもので、黄褐色砂土層を掘り込んで構築されている。西半分は農道下に入っているので、

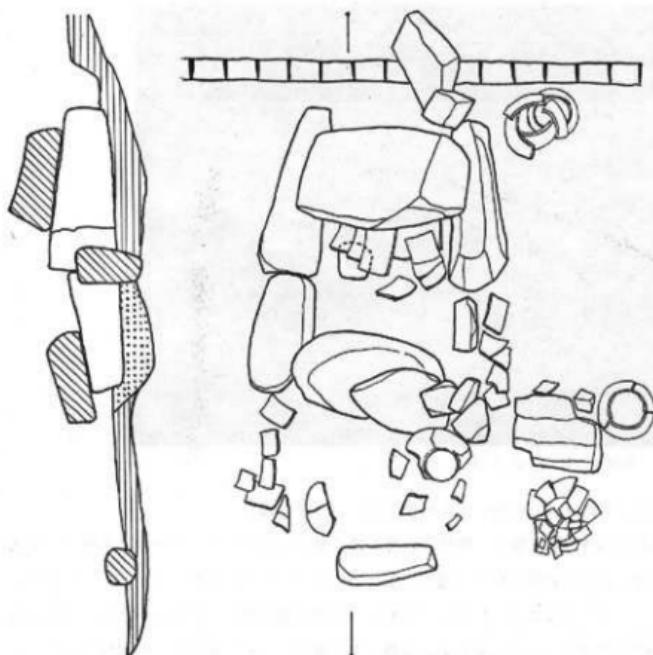


第20図 第5号住居址全景



第21図 第5号住居址実測図 (1:40)

検出された壁は北壁の約三分の一程度と南壁の半分、及び東壁だけであったが、主軸方向をN—19°—Eにとる隅丸方形プランで、一辺6mを算える大形なものであることが知られた(第20.21図)。

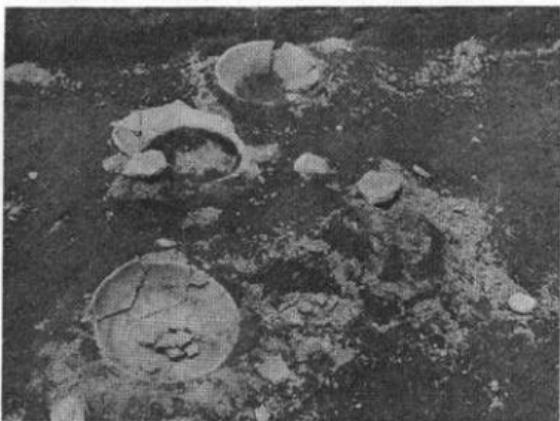


第22図 第5号住居址竪穴測図 (1 : 20)

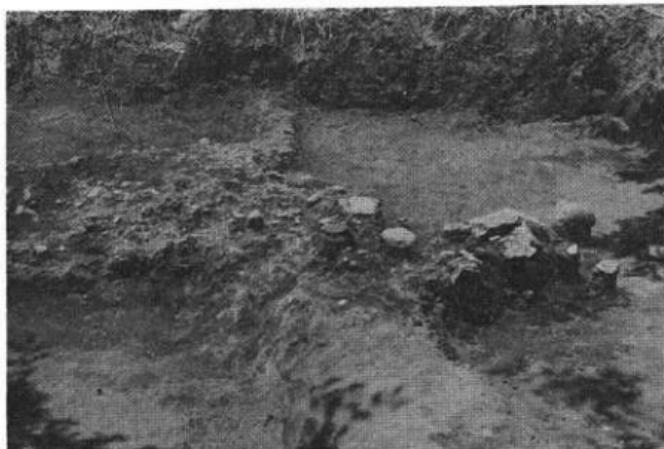
壁高は、北壁で14、南壁9、東壁10cmで、黄褐色砂土層を掘り込んでいるため軟弱で崩れやすい。しかも、低い壁高のゆえもあるうか、周溝など壁面を保護する施設も見られない。床面上の施設として、かかる大形の堅穴にあって、柱穴の存在は当然

に予想されるところだが、本址において判然とした柱穴を見出すことはなかった。北東隅近くのピットは輪郭不整、南東隅のピットは断面V字形で共に問題を残す。

竪は北壁の中央に接して設けられている。石組罐で、75cmの幅をもって各列2枚あて安山岩質の板石を90cmに亘って立て並べ、その上に同じく板石二枚を架している。二枚の天井石は密接せず、30cmの空隙があり、この真下に支石の据えられているのが見える。これらの石塊は、強い火熱を受



第23図 第5号住居址土器出土状態



第24図 集石址全景

けいすれもひび割れ、それは支石においても同様だった。(第22図)

なお、竈の石組から45cm手前に離れて棒状の石塊が横に据えられている。この間は平坦で、床面上には甕2ヶが倒置の状態で発見された。竈内底部は壁に近づくにつれ僅かにあがっている程度、特別に傾度が延びているとは見受けられない。底部下の状態は焚口部では相当に下方まで火熱が及んでいる。竈内遺物の状態について、支石上には甕が1ヶ体分、そして先記したが竈焚口直前とその横に甕が倒置の状態で残れて存在。この他、住居址内遺物の出土状態について述べると、竈の右横壁に接して8点の土器(甕3、總3、高坏2)がある。このうち、完形をとっているものは總で、2ヶは正位の状態で据えられていた。(第23図)一方、東壁近くでは高坏・甕の破片が出土し、前者は4、後者は1点、そして、東南隅には逆位で置かれていた、ほぼ復元できる高坏1点と同破片3点。これら土器はいづれも床面密着の状態をとっていた。

#### 集石址

B21、B22に発見された遺構で、黄褐色砂土層上に13cmほどの黒色土層を置いて、同上に礫を10~15cmに敷いた遺構で、礫中には拳大の丸石、角砾、瓦片、土器片が混っている。(第24図)

この他、礫層から黒色土層にかけて木炭片と縄、斧頭、及び錢貨が出土したところから

(第25図)一応墓址と推定した。但し、人骨



第25図 鉄斧頭出土状態

片の検出は見られない。礫の存在している範囲は1.0×3.0mの長方形プランをとっている。

#### B地区

長野電鉄線路の北側で、現在の農道の西方に支道を分岐させ、且つ北西にカーブするまでの35m間で、農道東側で、幅杭南端東をA1として西方にEまで、北

へは18までとグリット杭を設定した。（第19図）

B地区的地層について、現地表面のレベルはA地区とさして異ならないが、第1層の黒色砂質土層が厚くなると共に、A地区では次層が黄褐色砂土層であるのに対し、ここでは第2層（漸移層）、第3層（黒色砂質土層）を経て黄褐色砂土層に至り、84～87cmとA地区的それに倍する深さを持つ。ただ、後述する遺構の存する黄褐色砂土層直高面のレベルは63cmと高く、瓶状土器単出地点（C10グリット）でも土器が出土した黄褐色土層直上面は地表下75cmと、他グリットのレベルより10cm高い。

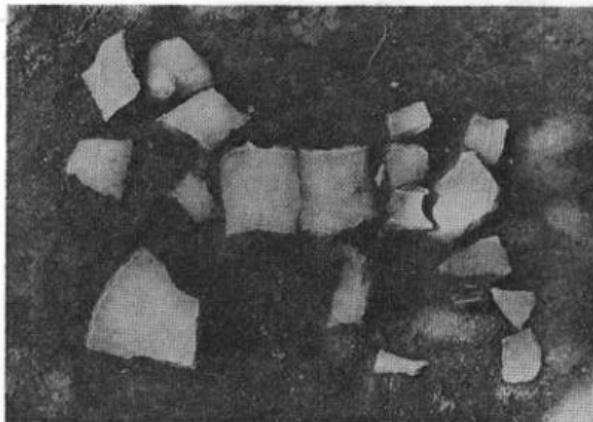
#### 瓶状土器単独出土地点

周辺のグリットからは何ら遺構・遺物の発見がないなかで、C10グリットの2m<sup>2</sup>の範囲内においてのみ一括土器の出土があった。このグリットの層序は-34cmまでが黒色砂質土層、-55cmまでが漸移層、-75cmまでが黒色砂質土層、以下が黄色砂質土層で、土器出土のレベルは黄褐色砂土層直上の-75cmである。

土器は1ヶ体分が西に倒れて潰れ、破片は扇形に展開していた（第26図）。出土面には住居床面的な敲打の痕跡なく、配石なく、燐火など火熱を受けた痕跡も見られない。ただ黄褐色砂質土層上面に置かれていたという状態で、伴出遺物として須恵器大甕破片1点がある。

#### 土器集積址

D15、D16グリットを中心として、径3mの円形範囲内に土器片が集積している遺構で、レベルは第3層の黒色土層下半から第4層の黄褐色砂土層直上までの10cm前後の厚さを持つ。土器片のみが層をなしているというほどの状態ではないが、第3層の黒色土層は、同包含層に至るまでは軟かく、発掘は容易であったが、包含層に至ると小砾を混えて、にわかに堅緻になっている。同包含層



第26図 瓶状土器出土状態



第27図 土器集積址全景

からは、石塊・木炭片、焼土塊等は発見されず、また、同層直下の黄褐色砂質土層上面にも人為的な痕跡を認めることはなかった。包含層の厚さには、中心部、周辺部間に差異を認めることなく、周辺部に特別な一例えば配石等は施されていない。土器片を露呈させ

た結果、経3mの円形が描かれたという次第である。（第27図）

出土遺物について、土器は総て土師器のみ、器形は高杯が圧倒的で甕がこれに次ぎ、壇・手捏ね土器が混入している。いずれも破損していて完全に復元できたものは小形の手捏ね土器だけである。高杯のうち、比較的の形状を明らかにしている部位は脚部のみで、それも上端は磨滅が著しく、裾部は多く破砕されてしまっている。杯部も同様の細片だが、杯中央に小孔を穿ってから破碎したと思われる資料は見出せなかった。甕は破片数が多いが細片で、殊に口縁部から肩部にかけての破片に乏しく、その器形を窺うことはできない。底部破片は図示した2点のみである。壇形土器も細片である。土器以外の遺物としては剣型石製模造品の破片1点と扁平な滑石製勾玉1点で、勾玉は集積址から東へ2m離れたB15グリットで黒色土層の下部よりの検出である。（第28図）

#### C地区

北に直行する50m間で、延徳沖の水田地帯に臨む標高340m以下の地区で現状は林檎園である。（第19図）

層序はA・B地区と同様に第1層は鷲黑色砂質土層、第2層黒色土層、第3層黄色砂質土層だが、第1層は地表下45~50cm、第2層は同70~80cmと深く、そして第3層は粘質を帯び始めてきている。かつての分布調査時にも遺物の発見はなかったが、今回の調査でも遺構・遺物の検出はなかった。



第28図 勾玉出土状態

## IV 遺 物

### 第1次発掘調査出土遺物

遺物は土師器が圧倒的に多く、それに若干の陶器・金属類・石器類が含まれる。

土師器は、壺形・甕形の2種類の出土がみられる。陶器類のうち須恵器は壺形・壺型・鉢形の3種類、灰釉陶器は壺形の器形がみられる。金属器では銅鏡が出土している。総体的にみての結論を先に述べてしまえば、出土遺物は一時期に集中していると考えられ、時期は、平安時代中葉～鎌倉時代の間と推定される。個々の遺物の特徴については、一覧表にして掲げておいたが、以下個々の遺物について若干の補足をしておきたい。

#### 土 師 器

##### (1) 壺形土器

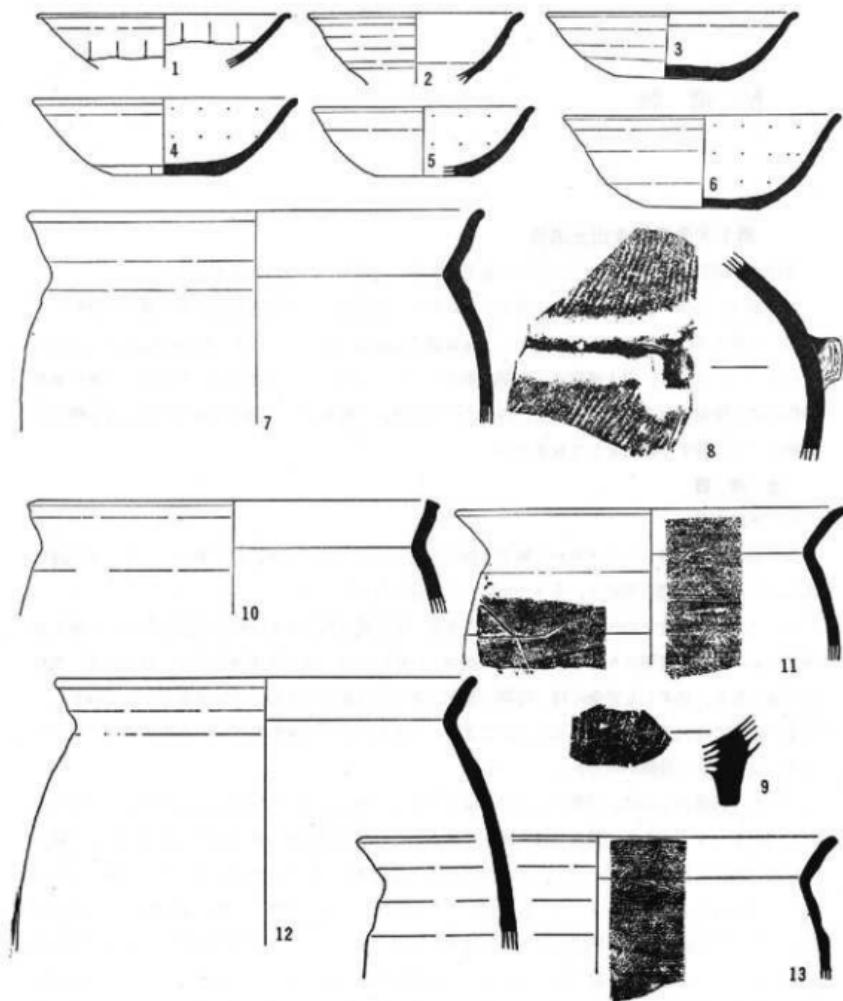
出土遺物中、完形もしくはそれに準ずる形で出土したものとしては、最も多い。これらは内面黒色処理をされた所謂内黒坏と、そうでないものに分けられる。

前者は、その法量を知れるものが6点ほどある。平均値は器高4.15cm・口径13.08cm・底径5.28cmである。後者も同様に6点あり、器高3.38cm・口径13.5cm・底径5.4cmである。出土状況・地点に相違があり、必ずしも完全に同一時期の遺物であるとは断定できない点を考慮した上でみても、両者の器高には大きな差を認めることができる。つまり内黒坏は塊形に近く、内黒坏でないものは皿形に近いという特徴がみられる。

技法上の特徴としては、内黒坏についてはロクロで一気に引き上げた後、底部を糾切して切りはなし内面をヘラミガキして黒色処理を施してある。この中には高台のあるものがみられるが（B-5・12）何れも付け高台である。なおこの内黒坏の外面底部下位及び底部をヘラケズリ整形しているものがみられる。（A-4・5、B-15）この技法は、大道上遺跡・下条灰塚遺跡出土の土師壺にもみられる技法である。内黒坏以外の土師壺についてみると、二次的な力を受けて内面の黒色がとれてしまったと思われる壺（B-11）がロクロ整形の後、内面をヘラミガキしている以外はロクロで一気に引き上げて整形し、底部を糾切している。その整形の仕方も大まかである。なおB-4の土師壺の底部には刻印がみられる。

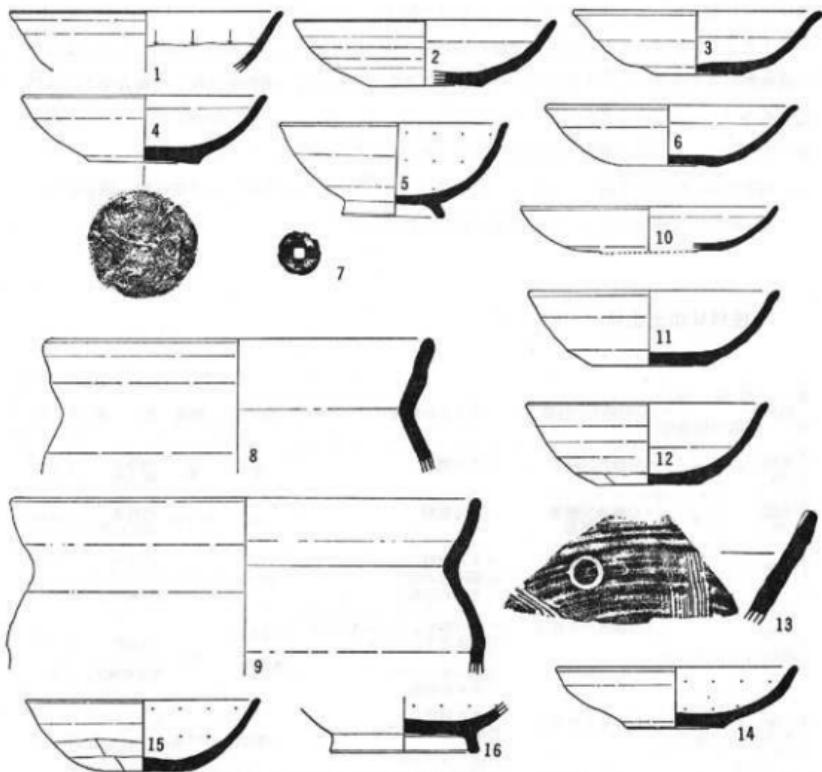
##### (2) 甕形土器

実測可能なものは全て、口縁部より体部上位にかけての破片である。実測可能な部分は輪積の後、ロクロ水引き整形を施している。全体の器形は、体部破片及び大道上遺跡出土の甕等からみて、長胴形である事は確実である。同様に、体部中位から底部にかけてはヘラケズリを施している



第29図 第1・第4号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

事も確実である。なおA-12の壺は、4号住の竈内に落ちこんでいたもので、完形品と考えられるが風化が激しく接合は不可能であった。



第30図 第1次調査住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

#### 須恵器・灰釉陶器

##### (1) 壺形土器

須恵壺（B-2・12）と灰釉壺（A-1、B-1）が出土している。何れもロクロで一気に引き上げて整形したものである。このうちB-12の須恵壺は前述土師内黒壺にみられる技法と同様、体部下位と底部にヘラケズリを施してある。

##### (2) 鉢形土器

須恵鉢（B-13）と灰釉のかかった鉢（A-9）が出土した。両者共内面の条痕からみてスリ鉢と考えられる。なお須恵鉢の内面には竹管の刻印がみられる。

#### その他の遺物

招聖元宝（B-7）が第3号住居址から出土している。書体は篆書である。その他、鉄の角釘、

及び1号住の袖石として使用されていた石皿が出土している。

以上若干の補足説明をしたが、本遺跡の遺物のうち一応セッテとしてとらえられるものは1号住の遺物群のみである。しかしながらこの1号住の遺物とそれ以外の遺物を比較した場合そこに時期的な差はほとんどないと考えてさしつかえない。そこで、これらの遺物の時期についてであるが問題となるのは、1号住の竈袖の部分から破片であるが鉄軸のかかったスリ鉢片が出土していることと、経聖元宝の住居址床面より出土している点で、かかることから現状では平安中期～鎌倉時代という広い範囲の可能性を考えておく必要があると思われる。

### 住居址出土土器 (第29回)

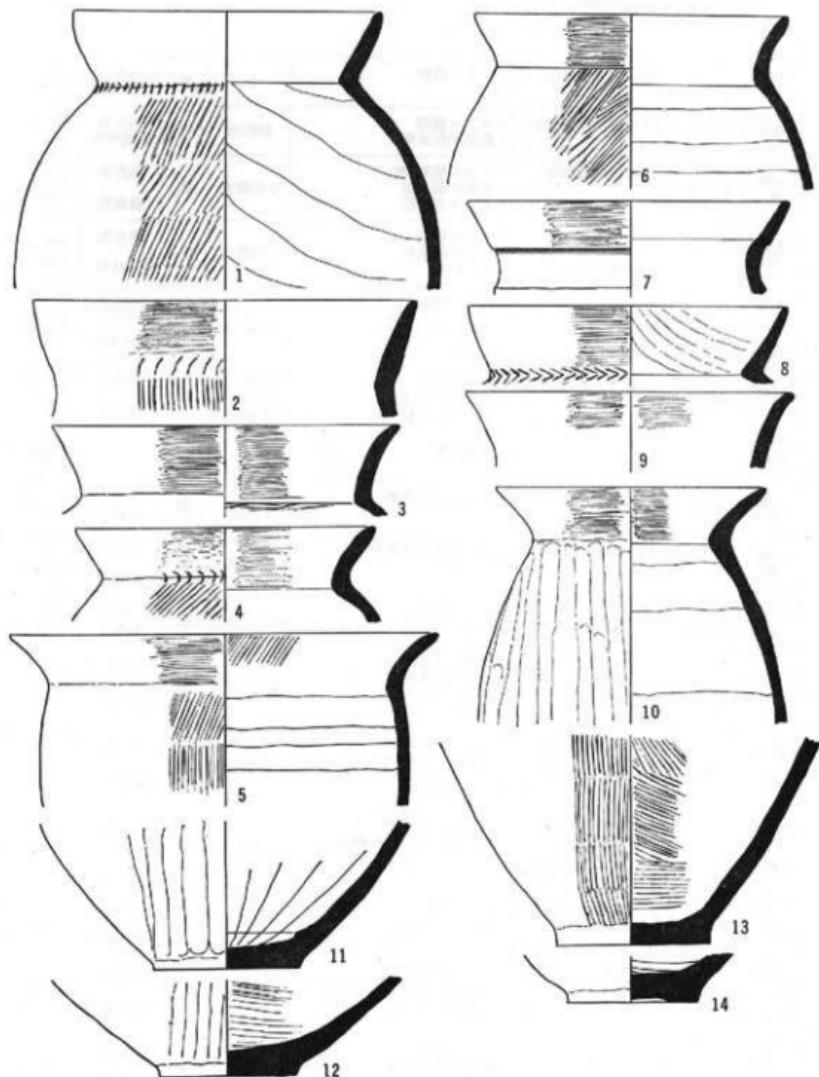
番 号	法量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
	器形 高	口径	底径						
A-1 灰輪 环		13.6		・口縁外反頸著	・ロクロ整形	良	堅	内外共 灰白色	1号住
A-2 土師 环		11.4		・口縁外反頸著 ・水引痕著	・ロクロ整形	良	やや脆	内外共 灰白色	1号住
A-3 土師 环	3.5	13.5	5.9	・口縁外反頸著	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・ロクロ右回転	砂粒含	脆	内外共 橙褐色	1号住 完形
A-4 土師 内黒 环	4.1	14.1	5.6	・口縁部やや外反	・ロクロ整形 ・外面体部下位、底部へラケズ ・内面へラミガキ ・ロクロ右回転	小石粒含 砂粒含	脆	内黒色 外淡橙褐色	1号住 完形
A-5 土師 内黒 环	3.7	11.8	5.2	・口縁部やや外反	・ロクロ整形 ・外面体部下位、底部へラケズ ・内面へラミガキ	砂粒含	やや脆	内黒色 外橙褐色	1号住
A-6 土師 内黒 环	5.0	14.9	6.0	・口縁部やや外反 ・水引痕著 ・体部下位内縁著	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・ロクロ右回転 ・内面へラミガキ	小石粒含	脆	内黒色 外淡褐色	1号住
A-7 土師 甕		24.4		・口縁部やや外反 ・内面スス付着	・ロクロ水引き整形	小石粒含 砂粒含	堅	内外共 橙褐色	1号住
A-8 須恵 壺				・四耳壺か? ・自然釉かかる	・内外共タタキ目 (外面頸著)	良	堅	内暗灰色 外淡青灰色	1号住
A-9 陶器 鉢				・スリ鉢か? ・鉄軸	・内面縦の条痕	良 朱泥	堅	内外共 褐色	1号住
A-10 土師 甕		22.0		・口唇部扁平 ・口縁直立気味	・ロクロ水ひき整形	砂粒少々含	堅	内外共 橙褐色	4号住
A-11 土師 甕		21.0		・口縁外反頸著	・ロクロ水ひき整形	砂粒含	堅	内外共 淡橙褐色	4号住
A-12 土師 甕		22.4		・口縁外反	・ロクロ水ひき整形	小石粒、砂 粒多量に含む	脆	内外共 橙褐色	4号住
A-13 土師 甕		25.8		・口縁外反 ・器肉うすい	・ロクロ水ひき整形	小石粒含	堅	内外共 橙褐色	4号住

住居址外出土遺物 (第30図)

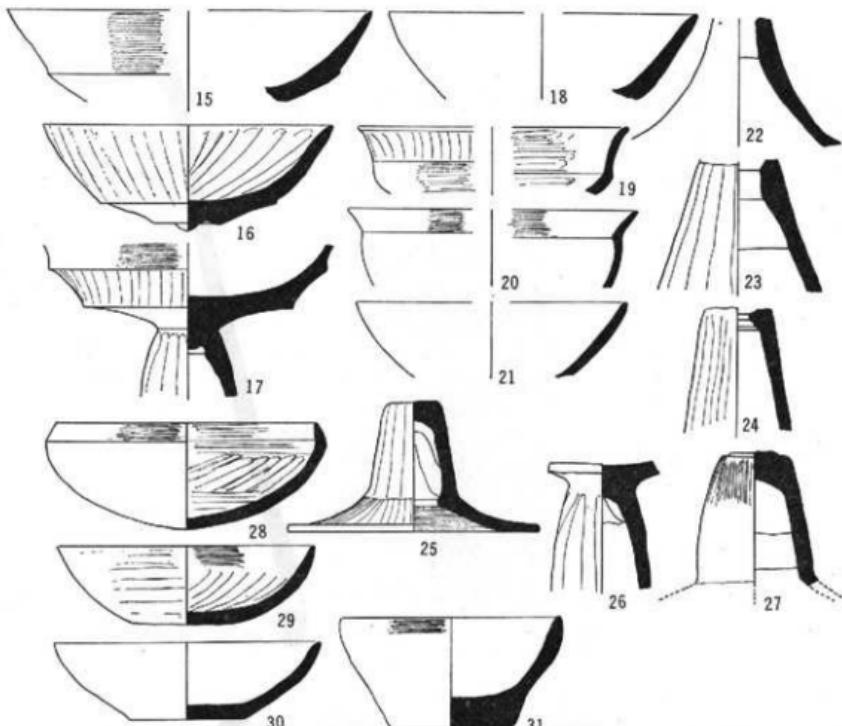
B 1	灰釉 杯		14.6	・口縁やや外反	・ロクロ整形	良	堅	内外共 灰白色	3号住	
B 2	須恵 杯	3.6	14.0	5.9	・全体に内彎気味 ・底部回転糸切	砂粒含	やや脆	内外共 淡青灰色	グリット26	
B 3	土師 杯	3.4	13.4	4.7	・口縁外反顯著 ・底部回転糸切 ・ロクロ右回転	小石粒含	堅	内外共 橙褐色	グリット30	
B 4	土師 杯	3.6	13.1	5.8	・口縁やや外反 ・底部刻印あり	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・右回転	小石粒含	堅	内外共 橙褐色	グリット33
B 5	土師 内黒 杯	5.0	12.2	5.4	・口縁やや外反 ・美型 ・器肉うすい	・ロクロ整形 ・内面ヘラミガキ ・ロクロ右回転 ・付け高台	砂質的	やや脆	内黒色 外橙褐色	グリット10
B 6	土師 杯	3.3	13.5	5.0	・縁やや外反	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・ロクロ右回転	小石粒、砂 粒多量に含	堅	内外共 橙褐色	グリット35
B 7	銅鏡				絞壓元宝				3号住	
B 8	土師 壺		21.0	・口縁やや外反	・ロクロ水引整形	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	グリット40	
B 9	土師 壺		25.2	・口縁やや外反	・ロクロ水引き蓋形	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	1住土 壺(1 住を切 る)	
B 10	土師 杯	2.5	13.8	5.0	・口縁内彎 ・カワラケ的 ・器肉うすい	・ロクロ整形	砂粒少々含	堅	内外共 橙褐色	グリット216
B 11	土師 杯	4.0	13.9	6.0	・口縁やや外反	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・内面ヘラミガキ ・右回転	小石、砂 粒含	脆	内外共 淡橙褐色	グリット215
B 12	須恵 杯	4.3	13.0	5.5	・口縁やや外反	・ロクロ整形 ・底部回転糸切へラケズリ ・外面体部下位へラケズリ ・ロクロ右回転	砂粒含	脆	内外共 淡青灰色	グリット202
B 13	須 鉢			・口縁やや内彎 ・体部直線的に開く ・スリ跡か? ・刻印あり(竹管)	・ロクロ水引整形 ・内面綱のクシ状の線有	良	堅	内外共 青灰色	グリット222	
B 14	土師 内黒 杯	3.3	12.9	5.1	・口縁やや外反 ・体部下位外反	・ロクロ整形 ・底部回転糸切 ・内面ヘラミガキ	小石粒含	堅	内黒色 外淡橙褐色	グリット416
B 15	土師 内黒 杯	3.8	12.6	4.4	・口縁やや外反	・ロクロ整形 ・底部回転糸切へラケズリ ・外面体部下位へラケズリ ・内面ヘラミガキ	砂粒含	脆	内黒色 外橙褐色	グリット426
B 16	土師 内黒 杯			8.0	・ロクロ整形 ・内面ヘラミガキ ・付け高台	砂粒含	堅	内黒色 外橙褐色	グリット405	

第2次調査出土遺物

第5号住居址出土遺物 (1~31)



第31図 第5号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)



第32図 第5号住居址出土遺物実測図 (1 : 3)

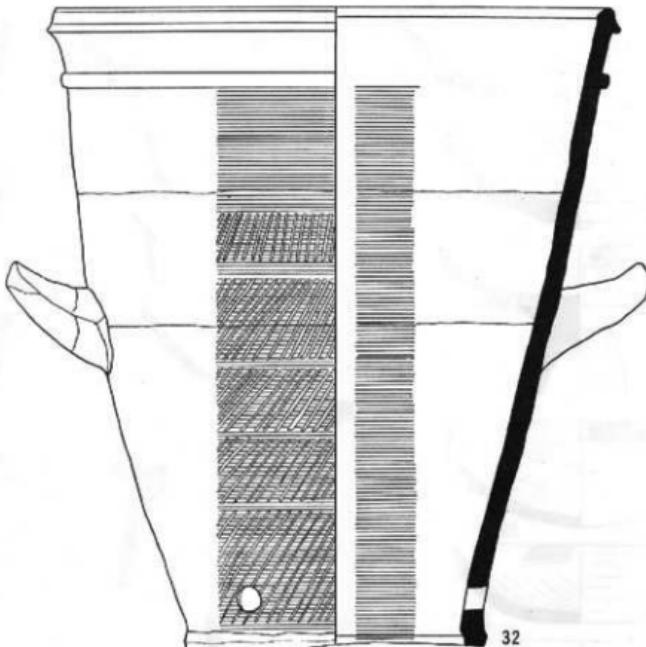
遺物の内容は総て土器部で、床面上（2～4、7、10、11、14）と石組窓（1、5、6、8、9、12、13）出土にかかり、1 フンドとして取扱うことができる。（第31、32図）

1～14は菱形土器破片で、完形を呈するものはない。器肉は厚く、胎土、焼成は必ずしも良好とはいえない。色調は黄褐色。口縁には外唇・外向・外反の三形態があり、その割合はほぼ等しく、1を除いて外側の整形はヨコナデで、外反するものについては内側にも施されている。

口縁外唇の形をとるものの胴部は、肩が張り、球形乃至卵形をとるらしい。1の口縁外側は範を横走させての整形だが、この胴部は特に肩が張っている。肩部と為す角はシャープで、同処には撚先による短線、8については羽状の刻み目が施されている。胴部の整形は粗い櫛の斜走。

口縁外向形には2、7がある。共に下端に軽く稜線が走り、2では刻み目が、7の後線下頸部には範研磨がされている。胴部の整形は粗い櫛の斜走。

口縁外反形態では、口縁幅の狭広が胴部形態に差を生じさせる。4、6は短く、口縁幅の狭いもののうち、4は胴部との接線に刻み目を付し、6の胴部肩は丸味をおびる。そして、胴部外面は共



第33図 C10グリット出土遺物実測図 (1:3)

に櫛歯による条痕整形。これに対し、口縁幅の広いものの胴部は肩の張らない卵形乃至長卵形。整形手法には細かな櫛の縦走（5）か、笠削り（10）が用いられている。

下胴部、及び底部破片は4点。11、12は笠削り整形、13は縦走する細かな櫛歯で、カーブから眼下と上胴部は卵形に復元される。

高杯は18を除いて床面出土で、いずれも破片、復元の結果も完形を呈するものは見られなかった。杯部破片は4点（15～18）、脚部破片は6点（22～27）で、胎土・焼成は変形より良好、堅緻。色調赤褐色、器肉は厚い。

坏部は大きく外彎する形で、下方に段が形成されている。15の段は微妙で稜線が走る程度。16は明瞭、17は2段に亘って屈折する特異な形態。器内外面の整形で、15は口唇から稜線までの間がヨコナデ、以下が笠を横走させての研磨、17は上部稜線まではヨコナデ、下部横線までの間は笠を縱走させ、更に下方は笠横走の研磨となっている。18は壺内の出土で火熱を受け、口縁に近く煤黒の付着が著しい。表面は剥落、内面は笠を横走させての研磨。なお、底部の中央には突起が見られている。(16、17)

脚には基部からラッパ状に外反するもの(22、23)と、筒状をなし、裾部において外反するもの(13、24~27)とがある。表面の整形は縱走する笠研磨が主体だが、26は笠削り、27は細かい櫛目の縱走によっている。

壺(19~21、28~31)の形態は多様だが、31以外は器肉は薄く、胎土・焼成は良好である。口縁が外反するもの(19、20)のうち、20は深い丸底をとるもの、口縁の内外はヨコナデ整形をとる。19は器肉薄く、色調は内外面ともに黒色。口縁は立ちあがり気味の外反で、口唇は僅かに丸味をもって外側に一線が走る中辺には稜が形成され、以下平底の底部へ収納していくものらしい。外面の整形は稜線までが笠縱走、以下は横走、内面はすべて笠を横走させての研磨。21、29、30は口縁側線が外彎して底部に至るもので、21は口縁の上部外側にのみヨコナデ、内面は黒色、29は内面上部がヨコナデで以下は底部中央に笠を走らせての磨き、外面は笠横走研磨、30は内面黒色研磨で外面底部は笠削り。28は口縁が内彎する形で、底部は丸底、口縁の表面はヨコナデで以下は笠横走の研磨、内面は放射状に笠を底部に集めての研磨。

これらの壺に比し、31は器内厚く、黒褐色、胎土粗、煤黒付着、重量があって様相が異なる。口縁外側にヨコナデがされている。

#### C10グリット出土遺物 (32、33)

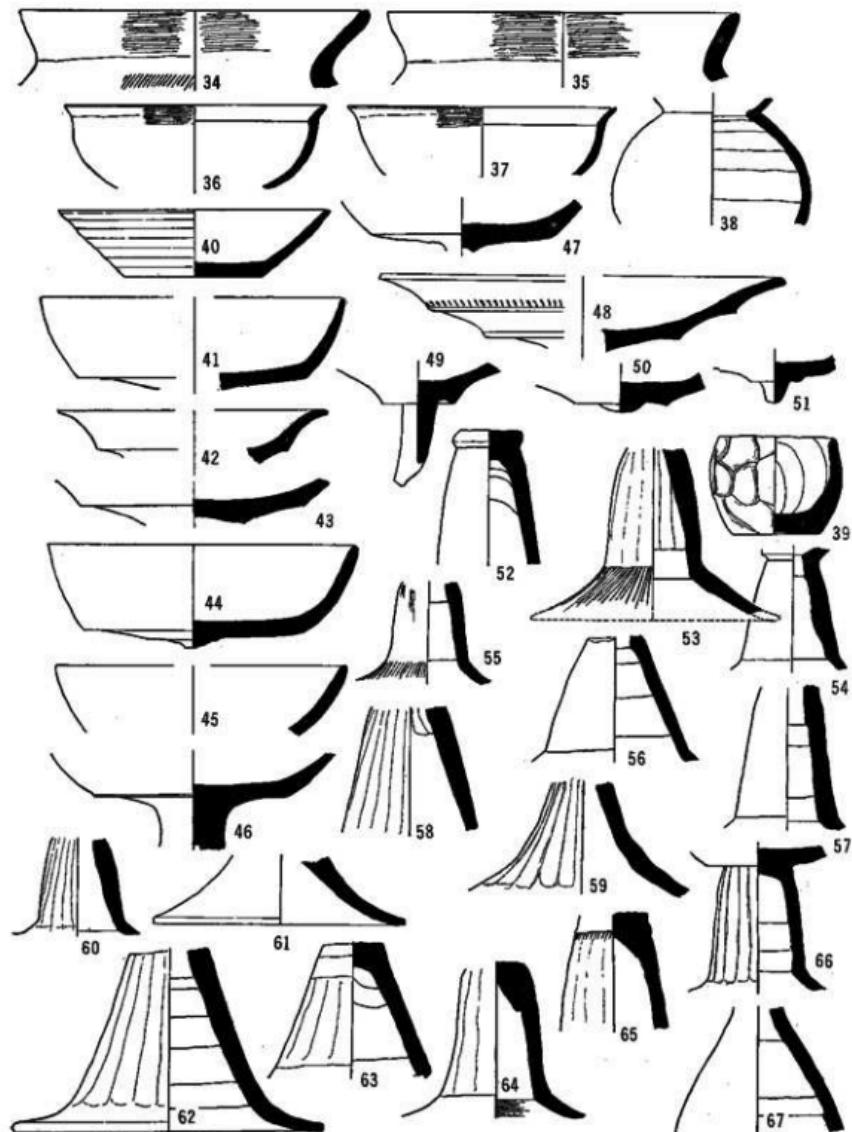
32は、口径28、底径15、器高32cmの大きさをもつ。土質はさほど良質ではないが焼成堅緻な胎褐色の須恵質土器半個体分で、これがC10グリット一面に扇形に潰れて出土した。側線はほぼ直斜状に収約する瓶形土器で、口縁部は断面三角形状をとり、2cm下には断面方形の凸帯が一条貼付、胴部の中辺には左右一对の角状把手が付されている。底部は欠損していて不明、ただ、底部に近い側面に径1.3cmの小孔が一对穿たれている。器表面は上部の貼付凸帯下から底部まで、横走する刷毛目が印され、その上に斜走する紋目が五段に亘って付せられている。内面は同じく凸帯部から底部まで横走する刷毛目、そして、内面下方にはタール状の付着物が認められている。

この土器に伴って出土したのが33の須恵器壺破片で、外面は条痕状紋目、内面は平滑。(第33図)

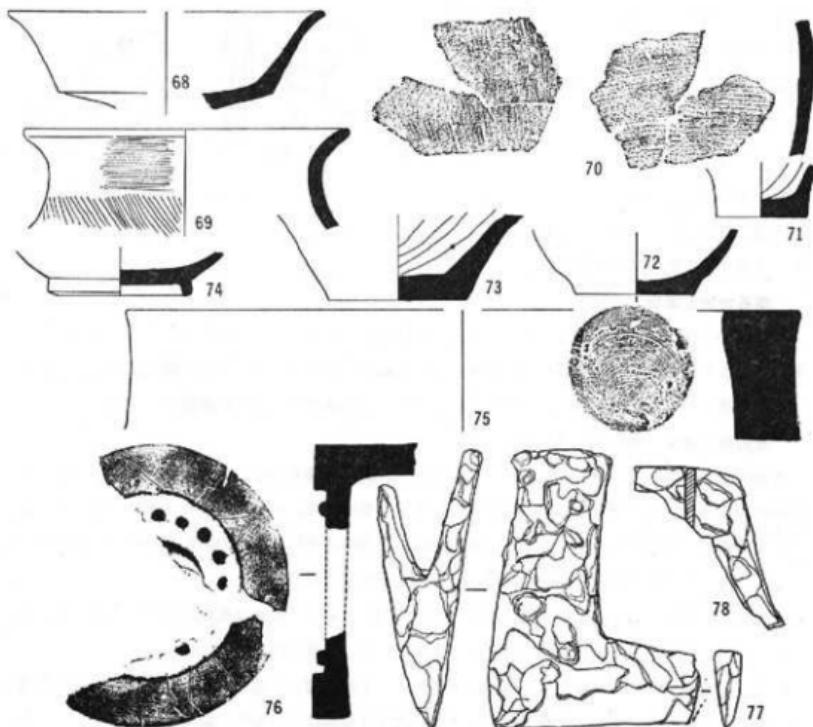
#### 土器集積址出土遺物 (34~67、70、71、73、79、80)

土器は土師器と須恵器で須恵器は壺の1点のみ。この他に2点の石製品がある。(第34図)

土器について、壺形土器の破片は数多いが、図示できる口縁部は34、35の2点である。外反形態をとるもので、内外とも整形はヨコナデ。肩部は斜走する細かい櫛目(34)で、以下は縱走させての整形(70)、内面はやや粗い櫛歯の横走で処理されている。底部は71と73、但し71は小形にすぎ、



第34図 土器集積址出土遺物実測図 (1 : 3)



第35図 集石址その他出土遺物実測図 (1 : 3)

或いは小形の手捏ね土器になるのかもしれない。塊（36、37）は、4号住出土の20と同形態で、口縁は外反、以下体部は丸底の底部へ外縁収約する深手のもの。36は表面磨滅が著しく、37は口縁外側がヨコナデ、以下箇横走研磨で一部に煤黒が付着している。

38は本址唯一の壺である。黄褐色で器質は良い。表面は箇横走研磨、胴部は最大腹径部位が中辺よりやや下方にくる偏球形をとる。壺（40）は須恵器、底部は糸切り。39は手捏ね土器、色調は黝黑色で完形である。

国示できた高壺は壺部破片が11点（41～51）、脚破片16点（52～67）。両者間で接着できたケースはない。

壺部には2形態がみられる。一つは口縁の外反するもの（42、43、48～51）で、器高はさほど深くない。48は縁の形成が2段に亘っているので4号住出土の17と同様だが、口径の大きさに比し器高は浅い。内外とも箇横走の研磨で、外面では上段後の上方に箇先による刻みが付されている。

形態の二は外側する深目のもので、口縁が平底気味の底部に稜をもって接している(41、44~46)。外面は竪横走の研磨、両者ともに底部中央に突起物があり、中には相当に長いものもある(46、49)。

脚は4号住出土と同じく、ラバ状にひらくもの(59、61、62)と中膨らみの筒状のものがあり、後者は更に数形態に細分できる。

#### 集石址出土遺物 (75~78)

75は径36cmを計る土師質大甕の口縁部破片、口縁端部は平坦で4cmの厚みを有する。外面に煤黒、断面に火熱を受けた痕跡がある。76は軒先丸瓦破片で径は14.5cmで素縁の幅は2.3cm、内側には20ヶの珠文が配され、中央に巴が彫型されている。77は鉄矛頭。78は鉄鎌破片。(第35図)

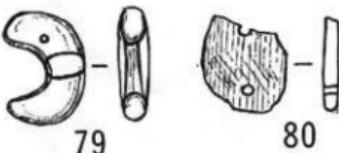
#### その他の遺物 (68、69、72、74)

A地区出土のもので、68、69はB27グリット出土。68は口縁外反し、稜を形成して底部へ移る高坏部破片、チョコレート色で堅敏。69は口縁外反の甕口縁で、口縁外側はコナゲ、以下は斜走する櫛歯整形。72はA15グリット出土の須恵器塊、底部には糸切り痕が印されている。74はA8グリット出土の灰釉陶器破片、高台断面は心も外骨気味。(第35図)

土器以外の遺物としては剣形石製模造品と滑石製勾玉がある。前者は先端が欠失していて同形品としては最末型式。勾玉は滑石製で偏平コの字形をとる。(第36図)

以上、出土遺物のうち、第5号住居址出土遺物と、土器集積址の遺物について、後者には須恵器の併出があるものの、まづは土器型式上、そして大きな差異はないものと認められる。そして、小布施町及び以北の地で調査された既資料と比較した時、小布施町畠回住居址や飯山市隈里環状溝遺構の遺物が、ほぼこれに併行するものと考えられ、古墳時代後期へ移行する和泉式(新式)に比定できる。

そして、かかる時期は、土器集積址中から検出の石製模造品、及び勾玉の祭祀遺物の編年とも合致する。



第36図 土器集積址出土遺物(1:2)

## V むすび

- (1) 第1次調査で検出された遺構は、住居址と土壙である。住居址は第2地区に3、第4地区に1あり、土壙は第2地区に2、第3地区に1発見された。
  - (2) 住居址はいずれも完存していたものはないが、第1号と第4号住居址の石組窓はほぼ完存していた。また、第3号住居址の床面からは宋錢が出土したことでも特記される。
  - (3) 土壙では第2土壙が注目される。 $P_1$ 土壙内では明らかに棺を納めたと思われる2段の掘込みと、 $P_1$ に伴なう付属施設と考えられる $P_2$ 、 $P_3$ の小土壙のあり方について、今後考究する必要がある。
  - (4) 第1次調査を通じて、遺構等の時期は大体古代の比較的新しい時期に限定される。とすれば、即断できないにしても、小布施の古代集落の範囲においては、時期によって、集落の位置が変動していたことも考えられるのであり、今後の問題点といえる。
  - (5) 第5号住居址はA地区のやや下寄りの農道沿いで、南へ約10mの所を中条西線堀が流下し、一帯は低地である。1辺6mの可成大形の和泉期の住居址1戸である。西側は農道が走っているため調査不能で全姿を検出することが出来なかった。北壁に石組窓を架設し、窓内には炊爨用土器が残存した。
  - (6) A地区下端部から拳大の円謨・角謨の集石址と共に時代の降る巴紋を付す瓦片、土師質大甕片を検出した。また、鎌・鉄斧頭及び1枚の古錢と共に木炭片が出土して、墓址であろうか。鐵錢のためか硫化鉄含有土質のためか、破碎のため年代測定が出来ないのが惜しまれる。
  - (7) 領形土器はB地区で、(単独出土)電鉄線から北へ約20m(C-10グリット)から出土。胎土、焼成とも良好な須恵質土器で、角形把手一对、底部に近い側面に二孔をうがっている。これと共に大甕の須恵器1片が出土しているが、生活との関連は不明である。
  - (8) 土器集積址はB地区北端に径3mの範囲に和泉期の土師器片が検出された。土器は高杯が多く、甕がこれに次ぎ、壺や手捏土器もあった。また滑石の劍型石製模造品の破片が1点出土した。さらに付近から滑石製の扁平勾玉1点も出土しているところから祭祀に関係する遺構とみた。とすれば古代集落跡と水田地帯の中間に位置し、その関係にも興味を持たれる遺構である。
- 以上、この調査報告を獨筆するにあたり、御協力いただいた関係各位に深甚の謝意を表する次第である。





第4号住居址壁（上 遺物出土状態、下 壁造構）



第2土壤（上 全景、下 遗物出土状態）



第5号住居址全景



第5号住居址遺



土器集積址

## 中子塚境遺跡

---

昭和53年2月21日 印刷

昭和53年2月28日 発行

編 集 小布施町教育委員会事務局

発 行 小布施町教育委員会  
長野県上高井郡小布施町大字小布施 1491-2

印 刷 小林印刷株式会社  
長野県上高井郡小布施町大字小布施1512

---